

一幕 (プロローグ) 信州諏訪湖

舞台奥、一人の老婆がモノローグ。舞台上では、老婆の回想が実際に行われる。

老婆

「おお、こんな激しい雨の夜は恐ろしい。二年前の夜を思い出す。あの夜、わしは胸騒ぎを感じて、諏訪湖の水を見に行ったのじゃ。そこへ、娘さんを2人連れた母親……じゃろう。きれいな着物をまとっていたのにならぬれになって、その顔は恐怖に凍り付いておった。わしが声をかけようとした時、白髪の恐ろしい形相をした侍が刀を振り回して襲ってきたのじゃ。母親は娘を守ろうと命乞いをしたが、侍は容赦なく襲いかかった。母は娘を侍から守ろうとなんと諏訪湖につき落とししたのじゃ。無惨にも母親は斬られてしまった……不気味に笑う白髪の侍は娘たちの姿を諏訪湖に探したが……その内、遠くから声がしたので逃げるように立ち去った。」

十郎左衛門のシルエット 「お美緒!」「お悠!」

老婆

「諏訪の地は荒れておる、嵐で田畑をなくし、人の命までも失う、人の心はすさみ、諏訪人は生きる希望さえ失った……長生きをしてもええことなどないのお……(見上げた空の雲行きに気がついて) また、嵐が来るぞ! 諏訪の神、龍神様のお怒りじゃ!」

雷、雨が激しくなる。逃げ惑う村人たち。空は曇り、雨風が吹き荒れる。村人たち、土嚢を運び諏訪湖の満水に備える。しかし、その努力も空しく、湖は荒れ狂い、村人を襲う。

(ステージング①)

song 1

♪ 諏訪の湖は 誰も手に負えない
すべて うばいさる 水のあばれ龍

平汰

おい、諏訪湖が満水になった。水が溢れるぞ!

土のうを積んでいる集団。逃げまどう人々。けたたましく鳴る半鐘。

文治

土のうだ! 土のうをもっと持ってこい。

荷車を押す集団。山のような荷物を積んでいる。途中、輪がくぼみにはまり。

熊

せえの(力を入れる)せえの。(抜けられない)ダメだ。

平汰

おい! 堰が切れた。あきらめて逃げろ!

皆逃げ出す。よく見ると逃げ出せず、うづくまる者、力尽きて倒れ込む者が数人いる。助けを求めるが誰も聞く耳をもたない。

そこに五六郎があらわれ、逃げ遅れた人々を助けたそうとする。

一人二人は抱えられるがそれ以上はムリ。置きざられた荷車を見付け荷物を全部放り出し、逃げ遅れた人々を荷車に。

一人で荷車を懸命に引っ張る五六郎。そこに村人たちが引き返して皆でそれを助ける。

♪ どうすればいい この諏訪を どうすればいい この湖を
(コーラス) 負えないぞ 諏訪の龍神は

♪ どうすればいい この諏訪を どうすればいい この湖を
(コーラス) 手に負えないぞ 諏訪の龍神は

すべて助け出した五六郎。諏訪の海を見つめ、決心を固める。
五六郎残して場面チェンジ

一幕（一場） 高島城

テロップ 「文政十三年（1830年）高島藩の内部抗争「二之丸騒動」から47年の月日が流れた高島城内。二之丸の諏訪家は当主諏訪大助の切腹と共に取りつぶし、三之丸千野家が、高島八代藩主諏訪忠経の下、家老職として実権を握っていた。しかし、その政權もまた、度重なる諏訪湖の氾濫と凶作に手を焼いていた」

高島藩郡奉行、諏訪十郎左衛門。傍らで、勘定奉行、鬼頭村之介が補佐を勤める。

五六郎その前に座ると深々と頭をさげる。あまり身なりの良くないこの男、見かけは堅物だが頭が切れる。藩の発注する土木事業などを請け負い、人を手配する「肯い人」。当時は卑しい人間が得ていた仕事であった。

五六郎の肯い書を吟味している十郎左衛門。それを快く思っていない鬼頭村之助。お家断絶になった二之丸諏訪家の十郎左衛門を、卑しい家柄と疎んじている。

十郎 その方が肯い人の伊藤五六郎か？

五六郎 へい。（頭をさげる）

十郎 肯い書によると、諏訪湖の排水口にある二つの島が、湖の水はけを悪くしていると。

五六郎 へい。もともと諏訪湖は上川、宮川、砥川、横川と、でかい河が流れ込んで。それなのに流れ出す排水口は天竜川一本だ。これじゃあ、長雨で諏訪湖が満水になるのもムリはねえ。

十郎 それで、お主がその流れを邪魔する島の一つ、浜中島を削り取って、流れを良くすると。

五六郎

鬼頭 バカを申せ！そのような大工事を、お前ごとき者ができると思っているのか。

五六郎

へへへ、そう言われちゃあ身もフタもねえんですがね。ですが他に言い出すやつもいねえもんで。

十郎 藩としても、年に二回、釜口から天竜川の枝払いと川ざらいをしているはずだが。

五六郎 （以下、プロジェクトで解説が入る）

けどねお奉行さん、諏訪湖の南側の穴ヶ村。小和田、文出、小川、有賀、福島、下金子の村は、ここんとこ水害続きで、ろくに米も採れねえ。おまけに住む家もねえ乞食同然の連中で一杯だ。

そこでだ、釜口をこうザクツと切り広めりゃ、湖の水も引いていいと思うんで。

鬼頭 それともう一つ、そこで出た土をね、水害でぬかっている穴ヶ村に持って埋め立てりゃ、ほら、広い水田になるってね。そう思うんで。バカをいうな、どうやって諏訪湖の反対岸に土を運ぶのだ。

五六郎 それが、この舟だ。（プロジェクトを指す）今まで諏訪湖にや、小舟しかお許しが出なかった。これだよ（プロジェクトを指す）

この位の舟を許可して貰って、こうして運びゃ、何とかなると思うんだ。

鬼頭 諏訪の海は龍神さまの御座す湖。しかも、そのバカでかい舟が9艘も必要だと！

五六郎 へい！そのくらいは……。

鬼頭 湖を舟でおおい尽くすつもりか！龍神様も腰をぬかすわ！ドカッ、こんな感じだ！ドカッ。

（プロジェクト終了）
龍神様がそんなコケ方したら俺もいたたまれねえが、その大舟も工事終わったら用済みだ。壊すなり燃やすなり、好きにしてもらっていい。

五六郎 うううう、無茶なことばかり。だいたい、そんな金を、どこからひねりだせばいいというのだ。

鬼頭 そこを何とか。ドカッ、ドカッとき込んでいただければと。

五六郎 ええい、気軽にドカドカと。ない袖は振れん！

鬼頭 えええっ？そうですか。聞けば、毎夜、下諏訪宿で芸者をあげて、

大判振るまいをするお大臣がいるってねえ。

背後の障子から賑やかな三味線と笑い声。男が芸者の帯をほどく影が見える

芸者の声 「あらまあ、お奉行さま、お戯れを」

鬼頭 「あははははははははは、良いではないか、良いではないか。あはははははは」

芸者の声 「あれええええええ」

元にもどる。

鬼頭 「・・・あれは、・・・打ち合わせだ！

五六郎 お願いでさあ。工事のお許しを。

鬼頭 ならん。そのような許可は出せん！

十郎 よいではありませんか。

鬼頭 何？

十郎 諏訪の百姓あつての、我が藩です。

鬼頭 しかし、浜中島も弁天島も、三之丸千野家が領内。勝手にそのようなことをされては・・・。

十郎 鬼頭どの。我が二之丸家は殿の命によりすでに取りつぶしとなった家柄。今さらなんの欲もございません。ただ、昨年の大洪水以来、諏訪の地は作物も獲れず、皆、飢えにあえいでおります。もし、釜

口の切り広めがうまく行けば、諏訪湖の水位が下がり、幾万の民百姓が救われましょう。それが唯一、我が望み。それに、この者は、切り取った土を有賀、文出に運ぶと申しております。そこは千野家の領地ではございませんか。

十郎 それはそうだが・・・。

鬼頭 領地に水田ができることを誰が不服といたしましょう。今こそ、釜口に大規模な水害対策を行うべきです。

十郎 しかし、このような不埒者を信用されては。

五六郎 不埒者だからこそできることもある。のう五六郎。

五六郎 まあ、そういうことさあ。

鬼頭 「・・・此度の件、殿も郡奉行に一任との仰せでもある。

十郎 さすれば、わたくしめにお預けいただきとう存じます。

鬼頭 ううう、勝手になさるが良い。

十郎 ありがたき幸せ。五六郎。

五六郎

十郎 へい。

五六郎

十郎 藩としても永きに渡り着手できなかった訳がある。それ相応の覚悟が必要だぞ。

五六郎 この五六郎。生涯の大仕事としてやらせてもらいてえんで。

十郎 心得た。それではお主に浜中島撤去と大型船の許可を出す。鬼頭殿、異存ござらんぬ。

鬼頭 郡奉行殿の仰せとあらば・・・。

十郎 左衛門、五六郎を見据えて。

十郎 五六郎、ワシからも頼む。この諏訪を救ってみよ。

五六郎 へい。ありがたき幸せ。(頭を下げる)

十郎 左衛門と鬼頭去つて行く。頭を下げる五六郎。

五六郎 浜中島の撤去か。

五六郎 腕を振り上げて。

五六郎 へええ、おもしれえことになって来やがった！

プロモーション(役者、スタッフ紹介)

一幕（二場） 浜中島

ここは浜中島。弁天さまの昇神儀式を行うために、ホコヲを綺麗にしているオヨネと熊。村人の姿も見える。工事の開始を今か今かと待ちわびている。

song2

「さてはめでたや さてはうれしや
諏訪の湖の一大事 浜中島は 浜中島は
船で運ばれ 消えまする」

♪見たか 聞いたか 諏訪のあらくれ
島をなくして 里を 守る

今こそ ひびけよ （力を合わせて）
かきたてる 思い （諏訪人の願い）
諏訪湖に 実りの 春がくる

ほっかぶりで顔を隠した一人の男。どこから逃げ出して来た素振り。誰もついて来ないとわかると、ほっかぶりをはずすと十郎左衛門。どうやらお忍びで城を抜け出して来たらしい。村人の中へと溶け込んで行く十郎左衛門。

「さてはめでたや さてはうれしや
二升五合いただける 飢えた百姓 集まって
命を賭けて 立ち上がる」

♪弁天さまの ご加護を受けて
どろにまみれて 里を 守る
今こそ ひびけよ （力を合わせて）
かきたてる 思い （諏訪人の願い）
諏訪湖に 実りの 春がくる

村人の熊、オキヨ夫婦。そこに訳あって預けられているお悠が楽しそうに昇神儀式の始まるのを待っている。村人がぞくぞくと集まってくる。

オヨネ さあ、準備できたよ。

熊 いよいよだな。

オヨネ 寂しくなるよ。この釜口の浜中島と弁天島は塩尻峠からの絶景だっ
て評判だったのにな。

熊 オしはこんな島、なくなっってせいせいするがな。

オヨネ 意地張っちゃって。でも、それで諏訪湖の水はげがよくなるならし
うがないね。

熊 ああ、みんなもそう望んでる。

オヨネ あたしら、この島に住んでたもんにとっちゃ災難だよ。

熊 俺のじいちゃんもばあちゃんも、そのまたじいちゃんもばあちゃん
も、ずっとこの浜中島で頑張って来たんだもん。

オヨネ ……あたしらをずっと見守ってくださった、この浜中島の弁天さ
まも見納めだね。

熊 ああ。でも、大丈夫だ。隣りの弁天島の弁天さまが、きつと守って
くださるよ。

少し涙ぐむ熊とオヨネ。一人の女の子（お悠8歳）は弁天さまのホ
コヲ辺りにいたが、そのうち、儀式を待って座っているオキヨ（下
諏訪宿の芸者さん）の元へ。お悠、オキヨからなにやら浮世絵らし
いものを貰って喜んでる。そこに、先程の男。粋な着流し、腰に
は一本刀でやって来る。

オキヨ 信さん、こっちこっち。

信さん おお、オキヨ。

信さんこと（諏訪十郎左衛門）は、度々お忍びでこの界隈をふらつ

いては、村人たちの良き相談相手になっている。姿見も良く、女性たちから絶大な人気を誇る。もちろん、村人たちは信さんが高島藩の郡奉行だとは思ってもいない。

オキヨ 信さん、場所とつてあるんだよ。ここ、ここ。早くしないと昇神儀式が始まっちゃうよ。

信さん わかった、わかった。そうせかすな。

オキヨ 信さんはいつ見てもいい男だねえ。

オキヨ オキヨ、具合でも悪いのかい。口が半開きだよ。

オキヨ うるさいね。このへちやむくれ。あっちへ行つといでよ。

オキヨ なんだって！

二人 二人言い合いをしている中、信さん、女の子を見つけて。

信さん 一緒にいいか。

お悠 うん。(懐から紙を出して)これ、おじさんに似てるね。

信さん 市川団十郎かい？おい、本当か。

お悠 うん。

信さん こうか？(団十郎の顔をマネする)

お悠 ほら、そっくり。

二人 はははは。

信さんとお悠、仲良くおしゃべり。

オキヨ こうしてみると、信さんとお悠ちゃん、何だか親子みたいだね。顔立ちもよく似てるし。

熊 何いってんだ。信さんは、ただの遊び人だよ。

オキヨ そこがまた魅力的なんだよね。

熊 女つてのはどうしてそういうのに弱いかね。

オキヨ なんだい熊さん、焼いてるのかい？

熊 バカ言つな。何でオレが焼きもち焼くんでき。

オキヨ 何だよ、顔真っ赤にして。ほら、仰いでやるよ、ホラホラホラ。

熊 やめろ！てめえ、亭主からかって何がおもしれえんだ。

オキヨ ははははは。

オキヨ ほらあんたち、夫婦でいちやつくのは後にして、始まるよ。

二人 ……ああ。

三山講の山伏。神妙に入つて来ると、その後に五六郎と妻のシズもついて来る。

熊 おいおい、見ろよ五六郎の神妙な顔。諏訪の荒くれが、あれじゃ壊れたカラクリ人形だ。

オキヨ ほんとうだ。おシズさんも恥ずかしくて下向いちゃってるよ。

オキヨ よっ！おシズねえさん。色っぽいよ。

シズ あたしやこういうの苦手だね。オキヨねえさん、その三味線でちよいと囃し立てておくれよ。

オキヨ ああ、いいよ。♪チャンチャラ、あっそれ、かっぱれかっぱれ……。

シズ いいね、いいね。やっぱりこうでなくちゃ。

五六郎 しっ！なにやつてんだおめえら。

シズ・オキヨ ……す、すいません。

山伏(お梶) うえい！「オン ソラソバテイエイ ソワカ」 「オン ソラ

ソバテイエイ ソワカ」うえい！

山伏2 みなさん、起立をお願いします。

山伏1 きり〜つ

山伏2 れい。

シズ 着席！

山伏たち すわるな！

おいおいと五六郎。わりわりいとシズ。

山伏(お梶) それではこれから、浜中島撤去に際し、弁財天の昇神の儀式

をとり行います。

山伏（オサト） すなわち一度神さまを神の国にお返して、いなくなつたス

キを見計らつて弁財天をお移しするよ、そついでにございませう。

山伏（オセツ） わかりましたか？

皆 へっ？

山伏たち おわかりか！

皆 ……はい。

山伏 よし！

山伏1 きをつけろっ

山伏2 れい。

シズ 着席！

山伏たち すわるな！

五六郎シズに何を言ってるんだと注意。ハイハイとお茶目なシズ。

お梶 うえい！「オン ソラソバテイエイ ソワカ」「オン ソラソバテ

イエイ ソワカ」

オサト 浜中島撤去により、ご本体のご移動を御願いたてまつります。願

わくば、めでたく昇神されたく、また、ついでと言つては何ですが

私めにお腹いっぱいのお団子を賜りたく、これ幸いなどと申しなが

ら、平岡村のウナギなどツマミながら…。

全員 （せぎ払い）

諏訪の氏一同。心より御願ひ奉りまする。うえい！

山伏、お祓いをするよ、天を見上げて。

山伏たち オフ！…イッた。

山伏1 きよつけっ！

山伏2 れい。

シズ ほら、あんた！

五六郎 おお、よし！工事の開始だ。おい、熊、頼んだ大舟はどうなってる？

熊 すぐに平汰と文治が舟に乗つてここまで来るはずだ。

五六郎 オキヨさんにオヨネさん。人足の腹を朝昼晩と面倒を見てもらわな

きゃならねえ。頼んだぞ。

オキヨ 腕のいい下諏訪宿の飯炊き女を三十人ばかり擁してあるからね。

オヨネ あんまり旨いからつて腰抜かすなよ。

山伏 わしは、それだけが楽しみなんじやよ。

シズ ちゃんと働かねえと、食わせないからね。

山伏 おつかねえな、おめえ！

五六郎 おつかねえとは何だ。オレの女房だぞ！

熊 五六郎の女房だから、おつかねえんだよ。

五六郎 まあ、オレもそうだけだよ。

シズ なんだつて、あんた！

五六郎 ……すつすいません。

信さん 諏訪の荒くれも、女房には形無しだ。

皆 あはははは。

シズ ……もう！

そこに、大きな舟が浜中島の横に接岸される。その頭から平汰と文治（二人は大工）。

平汰 おおい、五六郎、舟ができたぞ！ばかやろう。

文治 おめえの頼みだ。9艘のでっかい舟、寝ずに作ったんだ。感謝しろ

よ！このクソツタし。

信さん おお、これなら、泥を積んで向こう岸までいけるぞ。

シズ おったまげたねえ。あたしや、こんなでかい舟初めて見たよ。

五六郎 熊！人足は集まつてるか。

熊 あたりめえじゃねえか、千人くらいは集まつてるよ。

シズ みんな空きつ腹をかかえて、うずうずしてるんだよ。

五六郎 それじゃあ、まず、飯か？

シズ そうかも知れないねえ。

五六郎 よし、握り飯だ。ありつたけ持つて来い！

オヨネ・オキヨ あいよ！

おおいに盛り上がる村人。山伏たち弁天さまのホコラを片づけようとして。

五六郎 おおおおおおおつふ！

信さん どうした。

五六郎 弁天さまがいらっしやらねえ。

皆 なに？

シズ 最初っから？

五六郎 そんなバカな。今朝、ピッカピカに磨いたんだぜ！

熊 盗まれたのか？

シズ あんた！

五六郎 おれじゃねえよ。

山伏たちが逃げて行く。

五六郎 おい、あいつら怪しくねえか。

山伏たち ビクッ！

五六郎 待て！その女たち！身体検査をする、全員そこで裸になって、三

べん回ってワンと言え！

お梶 やなことだ。このスケベじじい。だれがそんなことを・・・。

オサト ワン！

お梶・オセツ やるなよ！

五六郎 あいつらが犯人だ！

皆 よし、つかまえる！

お梶 へっ、バシちやしょうがねえ。(かぶり物を取って) おい、逃げる

よ。

女たち おお！

その時、大騒ぎをしている人々から抜け出て来たお悠(8歳)がそ

の女たちに呼びかける。

お悠 ねえちゃん！

その呼びかけに立ち止まって反応するお梶。

お梶 えっ？

お梶、振り向く。

お悠 ねえちゃんだろ？あたいだよ。お悠だよ。

お梶 お悠？

お悠 ねえちゃん、今までどこにいたんだよ。

オセツ おい、いくぞ！

お梶 ……ああ。

女たち行ってしまふ。

お悠 ねえちゃん、ねえちゃん。(追っかける)

熊 お悠ちゃん。

オヨネ あんた！

熊 おお！

熊とオヨネはお悠の後を追う。その後を山伏たちや村人も追って行く。(待てええ！)

信さん とんだ船出になったなあ。

五六郎 へっ、なあに、また集まってくるさ。この舟を見りゃ、誰だって希

望が沸き上がって来らあ。

信さん 確かに立派な舟だ。

五六郎、信さんの顔をまじまじと見て。

五六郎

それより、あんた誰だ？見かけねえ顔だな。

信さん

俺か？・・・人からは、「遊び人の信さん」とか呼ばれちゃってるけど。

五六郎

そうか！おめえも人足ひとあしになりてえのか。

信さん

いや、俺は・・・。

五六郎

遊んでばかりじゃ生きちや行かれねえぞ。働け。

信さん

・・・ああ。しかし・・・。

五六郎、諏訪湖を見つめて真剣な眼差し。

五六郎

おめえにも白いまんまを食わしてやる。腹いっぱい食わしてやるからな。

五六郎、諏訪湖の空を眩くらしく仰あぐ。その姿を見て。

信さん

よろしく頼む！五六郎。

信さん、五六郎後ろ姿を頼もしく見つめる。

転換

一幕（三場） 下諏訪宿の茶屋

苦虫をかみつぶす鬼頭。風呂上りなのか頭には手ぬぐい、浴衣姿。そこに成金屋為五郎（下諏訪宿の商人）現れて、お膳とお酒。ここは下諏訪宿の行きつけの茶屋。

成金屋 それは、面倒なことになりましたな。

鬼頭 良いではないか、このまま見過ごそう。

成金屋 それではあの男に浜中島の撤去をさせるおつもりですか？

鬼頭 そんな馬鹿げた工事がうまくいくはずがない。

成金屋 なるほど、わざとやらせておいて、郡奉行の評判を地に落とすと。

鬼頭 その通りじゃ成金屋。どうじゃ、頭が良かるう。ははははは。

成金屋 はははは、いやいやおみそれいたしました。

鬼頭 ったく、先ごろも藩の財政が切迫しておるといふのに、斜面に桑を植

えさせ、養蚕に力を入れるとバカなことを始めおった。

成金屋 それはまた愚かなことを。諏訪には天下の下諏訪宿があるではありませんか。

鬼頭 まったくじゃ。蛾の幼虫ごときに藩の財政を救えるか！のう。

成金屋 ごもつとで！

鬼頭 しかも此度は島をなくすか。二之丸の生き残りが。おめおめと役職に

なんぞ付きおって。殿はいったい何を考えになっておられるのか。

成金屋 高島のご政道も忠恕さまで8代目。そろそろメタボでございませうか。

鬼頭 三段腹の霜降りじゃ！殿は藩主のうつつわにあらず。政権交代のチャン

スじゃ！

成金屋 よい機会かも知れませんな。

鬼頭 村中に不穏な空気を流せ。浜中島をなくすと諏訪神のイカリに触れる

とな。怯えさせて、浜中島に近づけさせるな。

成金屋 もうすでに、村の女どもをつかって、浜中島の弁天を盗ませました。

鬼頭 ほう、さすれば弁天の祟りも作りやすいな。

成金屋 まったく鬼頭さまは、悪党中の悪党ですな。

鬼頭 成金屋！それは・・・褒めておるのか？

成金屋 もちろんでございませうとも。

二人 むははははは。

鬼頭 よおし、成金屋。フシが家老になった瞬間にはおまえを鼻屑にしてやる。

下諏訪宿はお主がしきれ。

成金屋 ありがたきしあわせ。それではさっそく手を打ちましょう。

鬼頭 白描！

怪しい気配の浪人が現れる。

白描 はっ。

鬼頭 人ぎらいの変わり者だ。成金屋、好きに使っがよい。

成金屋 しかし、お奉行さま。わたしはこの者が少々苦手でして。

鬼頭 そう嫌うな。この者、金の為なら何でもする。重宝するぞ。

成金屋 ……はい。仰せとあれば。

成金屋、白描ハケル。

鬼頭 五六郎め。調子に乗りおって。今に思いしらせてやる。

転換

一幕（四場）村はずれ

二人の旅人、一人は尊飾北斎、もう一人は、弟子の為一。

北齋 先生、ほんとうにこっちの方でいいんですか？
 北齋 大丈夫じゃよ。信州諏訪湖のことは良く知っておる。特に釜口の弁
 天島と浜中島は名所中の名所だからな。
 為一 わかりました。先生を信じます。
 為一 そこにさっき、お梶を追って行ったお悠（8歳）がしょんぼりと通
 りかかって。
 北齋 おい、小嬢。諏訪湖の釜口にはどう行けばいい。
 為一 やっぱ迷ってんじゃねえか！
 北齋 お悠、ニコッと微笑むと突然走り出す。
 北齋 おい。どこへ行く。
 北齋 お悠、高台に立って。
 北齋 弁天島と浜中島だな。それならあそこだ。
 北齋 北齋と為一、そこに行き一緒に見る。
 北齋 おお。
 為一 先生、すぐそこでしたね。
 北齋 やっぱりな。
 為一 じいじ。
 北齋 なっ？
 為一 いや、さすがです。先生。
 北齋 あんたたち、そこに何しに行くんだ？
 北齋 ちよっと絵を描きに来たんじゃ。
 北齋 へえ、すごいな。絵描きさんなの？おじいちゃん。

北齋 わしは、おじいちゃんではない。葛飾北齋じゃ。
 為一 よっ！
 北齋 為一、拍手などしておおいに盛り上げる。
 北齋 へえ。
 北齋 えっ、知らない？江戸ではけっこう、有名な浮世絵師なんだけどな
 北齋 あ。
 北齋 歌川国貞なら知ってるよ。ほら（市川団十郎の絵をみせる）
 北齋 えっ！
 北齋 ああ、お嬢ちゃん。もういいよありがと。
 北齋 まったくかわいい顔して田舎者はこれだからこまる。
 北齋 北齋を感める為一。それには目もくれず、お悠は諏訪湖を見つめる。
 北齋 あそこは昔、島じゃなくて、地続きの荒地だったんだって。大きな
 北齋 堀を作って諏訪湖の水はけをよくするうちに、できた島なんだって。
 北齋 かあさまから聞いたんだ。
 北齋 ほほう。
 北齋 ほほうって、先生、何んにも知らないんじゃないですか。
 北齋 いやちがう。堀を作ったのは高島城の築城の折りじゃ。この辺の百
 北齋 姓が知ってることじゃない。
 北齋 そうか・・・おまえのおっかさんは物知りだね。
 北齋 ……
 北齋 お守りをじっと見るお悠。
 北齋 かあさまは、一昨年の大水で死んだんだ。
 北齋 それはかわいそうなことをしたな。
 北齋 ねえちゃんも、あれからずっと行方しれずで・・・あの、ねえちゃ
 北齋 んじゃなかったのかな。

お悠、今来た道を振り返って、見失った少女を思い出す。

為一 ここは大変なところなんだなあ。

北斎 ああ、諏訪は大水の多いところだな。百姓は大変な苦勞をしていると聞く。

お悠 でも、五六郎が釜口を切り広めてくれるって。

北斎 五六郎？

お悠 浜中島を削り取って水はけをよくしてくれるって。それで、島がなくなっちゃうのは寂しいけど……。

そこに熊とオヨネ、お悠を迎えに来てくれた。

熊 お悠。

オヨネ 帰ろ。お悠ちゃん。

お悠 うん。いい絵を描いてね。おじいちゃん。

北斎 ワシはおじいちゃんでは……。

熊とオヨネも会釈。三人行ってしまふ。

北斎 ……ない。

為一 どうやらあの子、あの人たちに養ってもらってるみたいですね。

北斎 さあ、行こうか。名だたる名所はすぐそこじゃ。

為一 でも先生。さっきの子が、島がなくなると……。

北斎 ああ、水はけを良くすると言ってたな……。

(バシッと為一を殴る)

為一 うげっ！（吹っ飛ばす）

北斎 ばか者！島がなければ絵にならんぞ！

為一 そうですよ！（立ち直りが早い）

北斎走りだす。

為一 先生、どこへ行くんですか！

北斎 五六郎という男を探す！工事をやめさせるんじゃ！
えっ、でも……。ちょっと先生、待ってくださいよ。

転換

一幕（五場）くぼったみ村

ここは、災害で家を失った者や田畑を流された者たちが、身を寄せ合って生き永らえてる小さな集落。（ステージング③）

song3

♪風が鳴く 荒れ果てた野に
病に倒れ 飢えて死ぬ
この世の地獄 絶望の暗やみ

♪恵みを運ぶ 諏訪の海が
すべてを持ち去る 跡形もなく
嵐とともに、命までも。

♪ああ 諏訪の神よ われらに恵みを
ああ 諏訪の龍神 われらに慈悲を

♪ああ 生きる希望 耕せる大地
ああ 一粒の米を、与えたまえ。

力尽き、倒れる者、泣き伏す者、まさに生き地獄。そこに五六郎。
あまりの惨状に、目を覆う。

五六郎 なんてありさまだ。おい、すっかりしろ。

村人1 五六郎、もう、俺たちはだめだ。

村人2 このままじゃ飢えて死ぬだけだ。

五六郎 諦めるな。いいか良く聴け！高島藩から工事の許可が降りたんだ。

村人3 ……じゃあ浜中島を切り崩すっていう。

五六郎 ああ、一日二升五合の食いぶちだ。

村人4 一日二升五合？

村人1 そりゃ、すげえ。

村人2 みんな助かるな。

村人3 そんな夢見てえな話、本当にあるのか？

五六郎 ああ、それだけじゃねえ。島を削って出た土を、この有賀、文出の村に運んで水田をつくるんだ。

村人2 そんなこと本当にできるのか？

五六郎 できるさ。水にぬかって荒れ果てた土地はみんな田畑に生まれ変わる。

村人3 そりゃすげえ。なあ。

村人4 ああ、田んぼに種がまける。

五六郎 そうだ、秋には黄金色の田んぼが生まれる。

村人2・3・4 ああ！

村人1は、五六郎、村人2、3、4の喜ぶ顔とはうらはらに、憂うつそうに沈む。五六郎それに気がついて。

五六郎 おい、どうした？

村人1 おらあ、なんだかおつかねえ。

五六郎 えっ？どうしてだ。

村人1 この辺の村は、浮浪者や乞食同然の連中が集まるゴミ溜めだ。そんなものの為に、浜中島を削り取るなんて言ったら、他の村のものは何て言うか。

村人2 そうだ。削り取った土で諏訪湖が濁りでもしたら、漁師連中は、ほっとかねえ。

村人3 それに、天竜川の川下の連中が黙っちゃいなえよ。

村人4 ああ、そうだ。

五六郎 大丈夫だ。俺を信じろ。必ずうまく行く。

村人、肩を落とし、また怯えながら五六郎を睨む。

村人2 それにあの浜中島の弁天さま盗まれたんだって？

五六郎 ……釜口にはまだ、弁天島の弁天様がいらっしやる。

村人3 おらあ、おつかねえ。盗まれた弁天様の祟りがあるぞ。

五六郎 崇り？なんだそりゃ。
 村人4 なんでも、おっかねえ化けもんが出るって。
 村人1 オラそんなもんに関わりたくねえ。
 村人たち ああ。

村人たち、「とんでもねえことだ」とか言いながら立ち去る。

五六郎 おい！頼む、手を貸してくれ！・・・くそう、誰がそんな根も葉もねえ噂を・・・。

そのとき村の子供たちが、大声を出してやってくる。

子供1 おおい、こっちだぞ。
 子供2 「すいとん」をくれるって本当か？
 子供3 ああ、お梶たちが作ってくれたんだ。
 子供4 すぐええ、早く行こう。

三人の女たちが大きな釜に、煮込んだ「すいとん」を入れて、お梶や桶を持った人々に配っている。五六郎、そっと影に隠れて見守る。

お梶 ほら、順番に並んで。
 オセツ 割り込みはダメだぞ。
 オサト あたいたちが作った「すいとん」だよ。カボチャもネギも入ってるから、よく暖まるよ。
 お梶 おい、おめえ、さっきも来たじゃねえか。まあ、いいか、ほら、たぐさん持ってけ。
 オセツ はい、次。
 お梶 おい、そんなにがつついたら、咽を詰まらせちゃうぞ。ははは、そうか、そんなに腹が減ってたのか。
 オサト もう一杯食べてくかい。
 子供1 なあ、おねえちゃん。

オサト なんだ？
 子供2 浜中島に近づくと、ほらあれ。
 子供3 ほら、おめえ言えよ。
 子供4 弁天さまの祟りがあるって本当か？
 オセツ ああ、本当だよ。こんな大きな龍が暴れるんだ。諏訪はまた水浸しだ。
 オサト オセツちゃん！

子供たち わあああ、おっかねえ！（子供たち怯える）
 オセツ 大丈夫だよ。そんなことある訳ねえだろう。
 オサト ・・・・でも、嫌だよそんなの。
 お梶 そうか、オサトは大水で親兄弟を亡くしたんだったな。
 オサト ・・・・

オセツ、桶の中を見て。

オセツ お梶、もう終わっちゃまった。
 お梶 えっ？あんなに作ったのに。
 オセツ あっという間だったな。

お梶 ごめんな、今日は終わりだ。
 オセツ 今度は、もっとたくさん作ってやるからな。

村人がお梶、オセツ、オサトを囲んでありがたそうに拝みだす。

お梶 おい、やめろよ。オしたちはそんなガラじゃねえよ。
 オセツ これはな、弁天さまのご加護だよ。
 オサト そうだよ。弁天さまは、こうおっしゃってる。「喜びを分かち合えば倍になる、分かち合える人が居ればそれが幸せ」
 子供1 これがおねえちゃんたちの幸せなの？
 オサト ああ、そうだよ。だからそんなことするな。
 子供たち ありがとう。

子供たち、笑顔で去って行く。三人ともその場にへたり込む。

オセツ はあ、もう疲れて立ってられねえ。

オサト この「すいとん」徹夜で作ったからなあ。

オセツ でも、配り出したら、あつという間におわっちまった。

オサト 腹ぺこなんだよ。食うもんなんか何にもねえんだから。

お梶 なあオサト、あれ、もう一度、聞きたいんだけど。

オサト あれって？

オセツ オサトがさっき言ってたやつだな。

お梶 ああ、頼むよ。

オセツ うん。「喜びを分かち合えば倍になる、分かち合う人がいればそれが幸せ」

お梶 ……いい言葉だな。

オサト 死んだおっかあの口癖だったんだ。

オセツ 喜びが倍になるか。

お梶 じゃあ、オシは今幸せなんだな。

オサト お腹は空いてるけどな。

三人 はははは。(ググググウウウ) はあ。(ため息)

関心した五六郎出てきて声をかける。

五六郎 おめえたち、えれえもんだな。

オサト あつ五六郎。

オセツ やばい、逃げようぜ。

鎌を担いで逃げようとする。

五六郎 おい、どうして逃げる。

お梶 オしたちは別に…。

オセツ ちよっと忙しいんで。

オサト じゃ！

五六郎 おい、待て。

三人 ギクツ。

五六郎 浜中島の弁天さま盗んだのは、おめえたちだな。

お梶 やばい！

オセツ おまけに、弁天さまの祟りだなんて噂を流してるのもおめえたちだな。

お梶 全部バシてるぞお梶。

五六郎 だからなんだってんだよ。

お梶 なんでそんな事するんだ。

オサト オしたちは、あるお方の命を受けて人助けをしているんだ。

五六郎 人助け？

オセツ そうだ。このままじゃ、みんな飢えて死んじゃうからな。

オサト その人、お金たくさんくれるんだよ。

お梶 オサト！

オセツ ……ごめん。

お梶 この村はオしたちが守ってみせる。

五六郎 オセツ・オサト ああ。

お梶 おい。なんだか話がおかしかねえか？

オセツ おっ、おかしってなんだよ。

五六郎 そっそっだよ。別にオしたちはやましいことなんかしてねえぞ。

オセツ じゃあ、取り合えず、弁天さまを返してもらおうか？

五六郎 逃げるぞ！

お梶 おい、待て！

オサト オセツ、待ってよ！

オセツ、オサト、行ってしまふ。お梶、五六郎を振り返って。

お梶 五六郎、オしたちだって、いい事と悪い事の区別はつくよ。だけど

さ、この世の中、そんなこと言ったら食ってけねえんだよ。金を

もらったら何でもやるよ。その気になれば、弁天さまだって売っぱ

らって金にする。

五六郎

おめえまさか。

お梶

弁天さまは、売ってなんかいいえよ。……何か変なんだ。見てみると、こう体がこわばっちゃまって、体が動かなくなっちゃまうんだ。

五六郎

へえ。そりゃ、不思議だな。だったら、早く返したらどうだ。

お梶

その手には乗らないよ。いざとなったら、この腕を切り落としたって売っぱらってみせらあ。

五六郎

バカなことをいうもんじゃない。

お梶

じゃあな。(走り出す)

五六郎

おい、待て!

お梶、素早く去ってしまう。五六郎、追うのを諦めて。

五六郎

くそっ……。けっきょくバカをみるのは貧乏人か……。

五六郎去る。そこに、ぬっと現れる浪人。一部始終を白描が見ていた。

白描

……あの女、まさか、生きておったのか。

白描、編み笠で顔を隠すと立ち去って行く。

場面変って、峠の途中。五六郎から逃げて来た三人娘。

オサト

もう大丈夫か?

オセツ

やっぱ、五六郎にはバレてたな。

オサト

なあ、こんな悪いこと続けて、いいのかな。

お梶

金がなきゃ、みんな生きていけねえだろ。

オセツ

そうだよ。オサトが金を稼がなきゃ、あいつらみんな飢えて死ん

オサト

じまう。

オセツ うん。

お梶 この浜中島の弁天さんを売って金にするんだ。

オセツ・オサト おお。

お梶、オセツ、オサト去る。そこに北斎と為一。

為一

先生。罰当たりな連中ですね。

北斎

浜中島の弁天さまを売り飛ばすとはけしからん。

為一

だけど、あの子たち、きつと利用されているんだ。

北斎

それより五六郎じゃ。浜中島を守るんじゃない。

為一

何か訳でもあるんでしょう……。かわいそうに。

北斎

くそお、浜中島もなくなるわ、弁天はぬすまれるわ。諏訪の連中はワシの芸術をなんだと思ってるんだ。

為一

先生。わたし、弁天さまの方行つときます。先生は五六郎の方を。

為一走り去る。

北斎

為一! 待て! ワシは一人か? ……これ、為一。どこへ行く。諏訪

湖はどこじゃ! おい、ワシは誰じゃ。いいいいいい!

転換

一幕（七場）下浜の飯場

浜中島撤去作業。多くの人足が汗を流している。中には女も子供もいる。

（ステージング⑤）

song4

♪砕ける土 明日へと この一振りか 希望

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

♪希望の舟 えいえんの この実りを 里わに

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

五六郎 おい、みんな、作業の手を休めず聞いてくれ。幅二十七間半、横幅十三間だ。掘り取った土は天竜川に流すな。泥舟に乗せて、後で大船に乗せ替えるんだ。

♪したたる汗に カ・声こだまして なわが手に食い込む

夢追い 立ち上げれ 諏訪人

♪たわわ実る 稲穂見て 村が笑う 息づく

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

♪砕ける土 明日へと この一振りが 希望

諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

五六郎 三番区！作業が遅れているぞ。水中は二尺五寸だ。浅いところは掘り直しだぞ。

舟に土が積まれている。汗まみれの人足たち。みな疲れ切っている。後ろで太鼓に合わせて掛け声。「ドン！よいさ」「ドン！よいさ」が聞えている。

五六郎 よし、こんなもんだ。舟を出せ！
人足たち おお。

土を積まれた舟を人足たちが力強く押す。

信さん 前から綱で引っ張ろう。さあ、みんなこっちに集まってくれ、一気にひっぱり出すぞ。

人足たち おお。

信さん、人足たちと行ってしまおう。そこに五六郎の妻シズがやってきた。

シズ お前さん。

五六郎 おお、シズ。どうした？

シズ 着替えを持って来たよ。ちっとも家に帰って来ないから。

五六郎 まだ人足が足りねえんだ。これじゃあ、仕事にならねえ。

シズ 大丈夫、その内集まってくれるよ。

五六郎 だけど、中じゃあ、この仕事をよく思っただけでねえ連中もいてな。

五六郎 まあ、人には言い分があるんだろうよ。

シズ そろそろ日が暮れるね。あたしや、飯場に、戻って晩飯の仕度だ。

五六郎 ああ。

そこに信さん帰ってきて。シズ、信さんに頭を下げ、下手にハケる。

五六郎 お前けっこうやるな。おめえがいなけりや、ここまで作業がはかどらなかつたぞ。

信さん そうか？けっこう強引に誘われたんだが……。

五六郎 何？

信さん ははは、いや、何でもない。

五六郎 へんなやろうだ。はははは。

信さん、去っていくシズを眺めて。

信さん シズさんは実にいい女房だな。

五六郎 へへへ、そうだろう。なんだ？うらやましいか。

信さん ああ、うらやましい。

五六郎 やい、俺の女房に手なんか出しやがったら、承知しねえからな。

信さん わかっているよ。怖い顔するな。

五六郎 ならいいけどよ。

信さん ……実は、若い頃、下諏訪宿で女と暮らしたことがある。

五六郎 ほっ、やるねえ。

信さん 子供も二人できてな。あの頃は幸せだった。

五六郎 どうしたんだい。その女と2人の子どもは。

信さん 訳あって、離れて暮らしている。もう十年も前の話しだ。

五六郎 へえ。どんな訳があるかは知らねえが、一緒に暮らせるようにはならねえのかい？

信さん そのつもりだった。しかし、もうそこには住んでおらなかった。

五六郎 トロいんだよ。ちゃんと探したのか？

信さん ああ、この諏訪にはいるハズなんだが。まったく足取りがつかめない。

五六郎 しょうがねえ。俺も人肌ぬぐよ。おめえ、なんだか気にいったからよ。

信さん そっか。よろしく頼む。

五六郎 (人足たちに) よし。準備はいいか！

人足たち おお！

五六郎 舟を出せ！

五六郎と信さんハケる。よいさ、よいさの掛け声。太鼓の音も聞える。「ドン」「ドン」船はゆっくり沖にでる。そこに三人娘。お梶とおサトが剣術の稽古をしている。オセツは弁天さまを背負ってる。

おサト いててて。

お梶 おい、ムリをするなオサト。

オサト 大丈夫！…よし、もう一回。えい！

お梶 ははは、だめだめ！もつと腰を入れて。

オサト やあ！

お梶、オサトの木の棒をなんなくかわす。その時、お梶、頭を押さえる。

おサト お梶、大丈夫か！

お梶 いや、何でもない。

オセツ どうした、あたま痛てえのか？

お梶 ああ、ちよつと目まいが…。

オサト ごめんなお梶ちゃん。

お梶、お守りを見る。

オセツ それ、いい匂いがするな。

お梶 これがオレの唯一の証しだ。

オサト それだけでもね。お梶ちゃんが持っていたのって。

オサト 一昨年だっけ。お梶ちゃんが、天竜川の川つぶちに流されてたの。そつそつ、まるで土左衛門だった。あんときやビックリしたよ。

お梶 悪かったな。オレは悪運が強いんだ。

オサト まあ、あの大水に流されて、生きてるなんて、クマがお梶くらいのもんだな。

お梶 はははは。

二人 もう言うなって。

お梶 二人、お梶を見つめて。

オセツ そういえば、あんどきねえちゃん、って言ってた女の子がいたな。
オサト ねえちゃんって……。お梶ちゃん、身寄りなんてないって。
お梶 わからねえよ。何も覚えてないんだ。

オサト でも、お梶ちゃんがいて良かった。
オセツ そうだよ。そうじゃなきゃ、オしたちだって、どうなっていたか。
オサト あれから、二年も経ったんだな。

お梶、お守りを見つめる。

お梶 自分の名前も思い出せない。たよりになるのは、このお守りだけだ。
オセツ そのうち本当の名前を思い出さず。
オサト そうだよ。

オサト、そっとお梶の肩を抱く。

オサト それまで、あたいたちが守ってやる。
オセツ ああ。
お梶 オサト、オセツ……。

涙するお梶。そこに怪しげな侍3人。白描と侍1侍2だ。

白描 なるほど、そういう訳か。
お梶 あんた、誰だ！
白描 ふふふ、そんなことも忘れてしまったのか。まあ、その方がお主に
お梶 とっては幸せ。
お梶 なんだと！

白描 諏訪にまつわる遺恨。お前のような小娘が背負うには、ちと荷がお
オセツ もかろう。
お梶。こいつ知りあいか？

お梶 知らないよ。

オサト おい、お梶ちゃんに何の用だ。

オサト、棒つきれを構える。

白描 ほほう。用心棒か。これは心強い。

白描、言いが早いか腰の刀に手をかける。

オサト えっ？

オサトの持っていた棒つきれが真つ二つに。

お梶 オサト！

震えるオサト。お梶、オサトとオセツを守る。

白描 記憶をなくした小娘に用はないが、念には念を入れんな。やれ！

侍1・2、お梶に切りかかる。とっさによけるお梶。

ほほう。良い動きをするな。血は争えんか。

えっ？
命、もらい受ける。(刀をぬく)

侍1・2、お梶に切りかかろうとすると、そこに北斎と為一。

北斎 聞いちゃったぞ！(侍1の刀を杖で受ける)

為一 先生。やめてくださいよ。わたしたちには関係ないでしょ。(侍2
と何となく闘っている)

北斎 何を言っておる。関係アリアリじゃ。(けっこう殺陣になっている)

為一　　なんで？（北齋と為一はかなり強い）
 白描　　何だ、このじいさんは。
 北齋　　じいさんではない。葛飾北齋じゃ。
 為一　　いよ！（と拍手で盛り上げながらも、殺陣）
 北齋と為一、侍1と侍2の殺陣。白描は見ている
 白描　　・・・邪魔が入ったか。小娘、運が良かったな。
 白描、侍1、2　去る。
 為一　　えっ？ちょっと待てよ。あれ？やっぱり知らない？江戸ではけっこう有名な浮世絵師なんだけど。
 オセツ　　・・・歌川国貞なら知ってるけど。
 女たち　　・・・これですか？ほら。（全員、団十郎の浮世絵を震えながら見せる）
 為一　　ええええっ！ここにも歌川！
 北齋、為一をバシッ！
 為一　　うげっ。
 北齋　　この辺の者は、皆それを持ち歩いとるのか？
 オセツ　　これか？まあ、今大人気だから。
 オサト　　下諏訪宿で売ってるよ。何なら一枚あげようか？
 北齋　　（気絶寸前）
 為一　　ああああああ、いいんだ、おじょうちゃん。ちょっと聞いてみたかったんだ。
 北齋　　まったく、諏訪の連中のセンスを疑うわ。
 お梶　　・・・あっ、その、助けてくれてありがとう。
 北齋　　ああ、よいよい。まあ何だ。此奴がお主らを心配だとか何とか。オセツたちをか？

為一　　えっ、まあ、何というか。
 オサト　　じゃあ、おじいちゃんたちはアタイらをつけて来たのか？
 お梶　　なに！
 北齋　　いやいや、そういう訳では・・・。
 オセツ　　まさかおまえら・・・変態か？
 北齋　　こいつはな。
 為一　　えええっ！
 オセツ　　このやろう！
 オサト　　オセツ！
 おお！
 北齋　　いつの間にか為一の後ろにまわっているオサト、為一を羽交絞め。
 為一　　えっ？なにになに？
 オセツ　　この変態野郎！（バシッ！バシッ！チン！）
 為一　　がああ！
 北齋　　制裁は続く。北齋そんなことにはお構いなしに。
 北齋　　ところで、やつらは何故、お主たちを襲ったのじゃ。
 お梶　　わからないよ。
 北齋　　何か恨まれることでもあったのか？
 お梶　　さあ。あんなヤツ見た事もなし・・・。
 北齋　　どうした？
 お梶　　まさか、成金屋が。
 北齋　　成金屋？
 お梶　　ああ、アタイらにこの弁天を盗めって・・・あっ。
 北齋　　なるほどな。
 お梶　　でも、いい人だよ。
 北齋　　いい人が、弁天を盗めとな。
 お梶　　・・・オセツたちにとっちゃ、金をくれる人は神様だよ。

北齋 お梶 ほう。
 お梶 そうでもしなきゃ。生きちゃいかれない。
 北齋 そうか・・・じゃあその弁天、わしが買い取ろう。
 お梶 えっ、あんたこの弁天さま、買ってくれるのか？
 北齋 ああ。
 お梶 いくら出す。
 北齋 そうだな、これでどうじゃ。(指を一本立ててみせる)
 お梶 何だ。一両か。
 北齋 うっ・・・いや、十両だ。
 女たち (バシッ)
 女たち うげっ。
 為一 十両！売った！
 北齋 よし！決まった。
 為一 先生、いつからそんなご趣味を・・・。
 北齋 そのかわり。
 女たち えっ？
 北齋 ワシの浮世絵を諏訪中にはらまいてほしい。
 為一 えっ！
 北齋 いや、五六郎という男に会わせてほしい。
 オサト 五六郎に！
 オセツ そいつはまずいな。
 お梶 ちよっと待って。
 オセツ お梶！
 オサト お梶ちゃん！
 為一 先生！先生は・・・信州諏訪湖の絶景を守る為に。
 北齋 むろんじゃ。
 為一 すばらしいご配慮。
 北齋 これで五六郎という男にもなんなく会える。
 為一 でも、先生。今、本音がポロリと見え隠れしましたね。
 北齋 小さい！お前の志は、地を這うアリンコにも劣る。(平然と)

為一 えっ？でも、あの・・・えっ？
 オサト いいのかいお梶ちゃん。
 お梶 金だけ貰ったらトン面すんだよ。
 オサト そうか、やっぱりお梶は頭がいいな。
 北齋 なんじゃ？
 お梶 さあ、行くよ。十両十両。
 女たち おお！
 皆「十両十両」と走っていく。為一とオセツはドツキあつてる。お梶ひとりそこに残って。
 お梶 ねえちゃん・・・か。
 その時、持っていた弁天さまが光り出す。驚くお梶。
 お梶 何だこれ。(弁天さまの波動)うっ！
 お梶に天から不思議な光が射す。お梶、何かを思い出し顔をこわばらせる。
 お梶 ・・・・母上！
 暗転

一幕（八場） 浜中島のアホウ丸

浜中島、数時間後。無邪気な子供たちが騒ぎながらやって来る。

子供1 ホラ見ろ。バカどもが土を舟にのせて運んでるわ。

子供2 ありや阿呆のやることだ。はははは。

子供3 ああ、あの舟は「阿呆丸」だ。

子供4 そりゃいい。あほうが阿呆丸に乗って行くわ。

全員 やあい、やあい、あほう！あほう！阿呆丸よおー！はははは。

そこに五六郎走り込んできて。

五六郎 このやろう！

子供たち わああああい

と逃げて行く。そこに、漁師の染吉と作造。二人は、五六郎のやつてることが気に入らない。

染吉 子供は素直だなあ。

作造 そうだ。

そこにシズ。騒ぎを聞きつけてやってくる。

シズ あんた。どうしたんだい。

五六郎 いつも嫌がらせだ。気にするな。

染吉 やい、五六郎。この工事を今すぐやめろ！

作造 そうだ。（五六郎の工事を良く思っていない村人も集まって）そつ

シズ だ。そつだ。

何だい何だい、嫌がらせなんて唐変木がやることだよ！

五六郎 おい、相手にすんじゃねえ。

作造 こんなことすりゃ、魚が捕れなくなっちゃうじゃねえか。

染吉 そうだ。（村人たちも）そつだ。

シズ そりゃ、あんたたちの腕が悪いんだよ。

作造 なんだと！弁天さまを返せ！この罰当たりが。

染吉 そうだ。（村人たちも）そつだ。

シズ 弁天さまが恋しいなら、少しはあんたたちも探したらどうだい。

作造 バカいうな。ああいやあ、こつ言うつ。

染吉 そうだ。（村人たち）そつだ。

作造 おめえも、そつだそつだ、言つてねえで何か言え。「バシッ！」

染吉 痛てえ！・・・このおおお、おたんこなす！

以下、子供たちが一言づつ「たわいもない悪口を言う」

五六郎 おめえら子供に何言わせてんだ！

作造 へっ。口で言つてわからねえなら。しょうがねえな。

染吉 ああ、ぼこぼこにやつてしまおう。みんな、サクツとやつちまえ！

村人たち おお！

五六郎とシズを囲んで、じりじりと詰め寄っていく。そこにあの女

オセツ ねえ。あれ五六郎じゃないの？

お梶 そうだよ。五六郎だよ。

オサト まずいよ。あいつらにやられちゃうよ。

オセツ あたいらの十両が！

女たち五六郎を助けに入る。

作造 なっなんだおめえら。

お梶 おめえらこそなんだよ！

染吉 ああ。山下の浮浪者か。

五六郎 やめる。喧嘩はいけねえ。
 お梶 へっ、わからずやのへっほこ漁師が。
 作造 なんだと！
 染吉 食（し）のくせに生意（い）気（き）な口（くち）ききやがって！
 五六郎 おい！やめる！喧嘩してもしょうがねえだろつ。
 作造 もう、許さねえ。女だつて手加減しねえぞ。
 オサト それはこつちの台詞だ。この馬の糞。
 作造 何だと、この豚のケツ！
 シズの表情が変わる。
 シズ 豚？今、豚って言ったのかい？
 作造 おお。
 シズ ……殺す！
 オセツ やっちまえ！
 全員 おお！
 為一 もう手がつけられない取っ組み合い。五六郎も巻き込まれ、大騒ぎ。そこにやってきた北齋と為一。北齋は為一が引っ張る荷車で運ばれて来る。
 村人もいつの間にか増えて人でいっぱいになっている。
 為一 あれ、どうしたんでしょ？
 北齋 うむ、喧嘩だな。
 五六郎 やめるやめる！
 為一 先生！この人が五六郎でしょうか。
 北齋 うむ。
 五六郎、為一をぶんなくって北齋が乗っている荷車を奪う。
 為一 うが！

北齋 なに？
 そこにオセツもやってきて為一を殴る。
 為一 うが！…なんですよ。
 オセツ 何やってんだよ。おせえじゃねえか。
 為一 しょうがねえだろつが。先生が走れないっていうから。
 オセツ トロいんだよ。
 北齋 為一、大変だ。浜中島がもう半分も削られておる！
 為一 そうですね。
 北齋 なにいい！（気がついて）おい、何をする。これ、危ないだろつ。
 物すごい勢いで、取っ組み合いの中に突っ込む五六郎。
 五六郎 やめろって言ってんだろつが！
 皆 「ドカン！」「ひえええ！」っと、飛ばされる女たちと村人たち。
 北齋 （諏訪湖に落とされてもいい）
 五六郎 痛てててて！
 作造 おまえ、ワシを殺す気か！
 北齋 知るか！
 皆 いててて、何だ！このじじいは。
 北齋 ワシはじじいではない。葛飾北齋じゃ！
 為一 えっ？やっぱりぜんぜん知らない？いてて。
 北齋 江戸ではけっこう有名な浮世絵師なんだけど…。
 染吉 歌川国貞（うたがわ くにさだ）なら知ってるぞ。ほら。いてて。（団十郎の浮世絵を見せる）
 皆 ほら。いてて。（全員、団十郎の浮世絵を見せる）
 為一 くそおお！諏訪の連中は全員それを持っているのか！

団十郎に囲まれる北齋と為一。

北齋 くそおお、こうなったら諏訪湖の浮世絵を意地でも描いてやる。

為一 先生、やっとやる気になってくれましたね。

お梶 おい、十両。(弁天さまを突きつけて)

北齋 そんな浮世絵を持つてるやつは嫌いじゃ。

お梶 なんだとじじい!

オセツ 詐欺師か、お前ら。

為一 おめえこそ、泥棒だろ。

オセツ なんだと!

シズ、お梶が持っていた弁天さまを見つけて。

シズ おまえさん、浜中島の弁天さまだよ。(シズ、弁天さまを静かに受け取る)

お梶 あっこれは……。

五六郎 おめえたちも悪かったと気づいて、返しに来てくれたのか。

シズ ありがとうよ。

オサト ……いえ。

シズ、お梶の顔をのぞき込んで。

シズ あれ? あんたどっかで見かけた顔だね。

お梶 あんたなんか知らないよ。

シズ (気がついて) 佳代さんの娘じゃないか!

お梶 えっ?

シズ 今までどこにいたんだよ。みんな心配していたんだよ。

お梶 ……。

シズ ねえ、お美緒ちゃんだろ?

お梶 お美緒……それ……オレの名前か?

舟が諏訪湖を渡って向こう岸に向う。為一それに気がついて。

為一 先生、あれ!

北齋 おお、なんと勇壮な景色じゃ。

シズ あの舟があれば大丈夫。あたしゃ、あんな勇前な舟、生まれて初めて見たよ。

五六郎 この辺の連中はあの舟を「阿呆丸」だとぬかしやがる。

シズ 「阿呆丸」?

五六郎 ああ。まったく、人をバカにしやがって。

シズ いいじゃないか。

五六郎 えっ?

シズ だって、こんな仕事。阿呆じゃなきゃ出来ないよ。

五六郎 ははははは、まったく。阿呆な仕事だ。

シズ ああ。

五六郎、そこにいる連中に向って。

五六郎 おお。おめえたちもやってくれるな。

染吉・作造 えっ?

堂々と浮かぶ、「阿呆丸」を見ながら。

五六郎 あの一槽の舟の土から、どの位の田んぼが生まれると思う。よおし!

五六郎、浜中島の掛け橋を走って行くと、島の頂上まで駆け上がり、

鋤を手にする。それを高く振り上げ、土に刺す。

五六郎 見ろ。こうして鋤をたてただけ土は舟に積まれていく。この一塊

の土で、どの位の米が採れると思う。俺はなあ、諏訪湖の湖畔が収

穫の秋に黄金色に染まるのを考えると、いても立ってもいらなくなるんだ。

あっけにとられる村人たち。

染吉
作造
……あいつはすごいわ。

五六郎
スキのひと刺しは、腹いっぱいのおまんまだ。ほら、おめえたちもやってみろ！

皆、五六郎の熱意に圧倒されて。

染吉
作造
皆
……やってみるか。
……俺たちもやってみるか。なあ、みんな！
おお。

染吉、作造、そして、オサト、オセツ。さっきの子供たちまでもが、「やってみるか」と浜中島にかけあがり、作業を始める。村人は沢山いるといい。

面白い男じゃのう。

先生。

為一、紙と筆を出せ。

為一。

為一が、それを北齋に渡すと、北齋、何かに取り憑かれたように、下書きを描き出す。それを、サポートする為一。もくもくと作業を続ける人々。夕日に照らされ、美しく光輝く。

— 幕 — (休憩)

二幕（一場） 諏訪湖の見える丘

幕が開くと、北斎が絵をもくもくと描いている。表情も穏やかで知的である。

そこに、三人娘のオサトがやってくる。そっと近づき絵を覗き込む。

オサト おじいちゃん。絵、うまいなあ。

北斎 おお、オサトちゃんか。

オサト 諏訪湖の絵を描いているんだね。

北斎 ああ、ここから見える高島城や舟を書き写してるんじゃないよ。

オサト 浜中島と弁天島だ。

北斎 …… 浜中島はもう随分、切り崩されてしまったな。

オサト あっ、それ、富士山か？

北斎 そうだよ。ここから見る富士は、諏訪湖の湖面によく映えて実に美しい。

オサト ……

北斎 ん？オサトちゃん、どうかしたのかい？

オサト …… あたいは、こんな湖、嫌いだ。

北斎 えっ、どうして？

オサト 今は穏やかだけど、長雨が降ると、水が村や畑を飲み込むんだ。

北斎 うむ、この大水は荒れ狂った龍だと聞く。

オサト 一昨年の大水で、あたいの家は流されちゃった。

北斎 家の者はどうした？

オサト …… みんな死んじゃった。

北斎 そうか、それは辛かったなあ。

オサト でも、今は平気だ。お梶もオセツもいる。

北斎 そうだな。

オサト、腰に差していた木の枝を構えて。

オサト 今、剣術の稽古してるんだ。

北斎 ほう、剣術の。また、どうして？
オサト お梶とオセツをこれで守るんだ。えい！やあ！

微笑む北斎。今、描いていた絵を差し出して。

北斎 ほら、これをやろう。

オサト えっ？いいの？

北斎 ああ、いいとも。これはまだ下書きだ。

オサト ありがとう！おじいちゃん。大切にするよ。

北斎 （笑顔でうなづく）

嬉しそうに絵を見ているオサト。オサト去りぎわに。

オサト あっ、いけない。ありがとう。北斎先生。

北斎 ああ。（うれしい）

オサト去る。その様子を見ていた信さん入れ違いにやってくる。

信さん 諏訪湖は豊かな恵みも運ぶし、全てを破壊して持ち去ってしまう。昔も今も変わらない。それを神として崇めてきた。

北斎 神仏とはそうしたものですか。

信さん あの子たちをどう救えばいいのかわからないよ。

北斎 もうすでに救っているではないですか。

信さん それが吉とでるか凶か。やってみなければわからないよ。

北斎 そのために五六郎にすべてを託したのでしょうか？十郎左衛門さま。

信さん なんだ。知っておったのか。

北斎 藩主忠愍さまから、お噂は何っておりました。

信さん そうであったか。

北斎 今、高島藩の財政は悪化していると聞いていますが。
ああ、藩再建を目指して検地なども行っているが、このありさまだ。
江戸も商人の力が増して、以前の武士の姿はありません。どこも財

政は火の車。
 信さん 「役人の子は、にぎにぎをよく覚え」・・・か。
 北斎 さよ。袖の下がモノをいう世の中です。そんな世相を皮肉った川柳が流行るのもうなずけます。
 信さん 我が先祖も、そうした世の流れに打ち沈んだのであろう。
 北斎 高島城の二之丸と三之丸の騒動でございますな。
 信さん 力と金が人をめくらにさせる。家老職を奪い合い、醜い争いをしたと聞く。
 北斎 切腹された二之丸の諏訪さまは、ずいぶん、民百姓から慕われていたと聞いておりますが。
 信さん ・・・・それも闇の中。責任を取られた大助ごのも諏訪家の菩提寺にすら祀られてはおらん。・・・お家断絶とは惨めなものだ。
 北斎 しかしながら、貴殿は高島藩の郡奉行。さぞやご苦労されたことでしょうな。
 信さん 祖先の罪滅ぼし・・・といったところか。
 北斎 政に人力なされませ。さすれば、旅立たれた命も救われましょう。
 信さん 此度の工事、まったく不安がないわけではない。
 北斎 人事を尽くして天命を待つ。問題は結果ではありません。大切な命はそれを勇気を持って行えるかどうかです。
 信さん 天命を待つ・・・か。
 そのとき、遠くの方から半鐘の鳴る音。
 信さん あわてて走りさる。北斎それを見送って。
 北斎 あなたさまは、この諏訪を変えるお人です。
 転換

二幕（二場）山下のくぼったみ村

貧民区が焼き払われている。激しく鳴り響く半鐘の音。すでに村は火の海。もう手がつけられない。
 影の声 火事だ！にげるー！
 影の声 誰か！助けてくれえ！
 五六郎 おい、大丈夫か。
 お梶 だめだ。村ぜんぶに火がまわってる。
 五六郎 逃げ遅れた者はいないか。
 お梶 わからないよ。気がついたらもう火に巻かれていたんだ。
 五六郎 くそう。
 熊 おおい。五六郎。
 五六郎 怪我人は。
 熊 まだ一杯いるよ。手が足りねえ。
 平汰 早くしろ。こっちだ。
 熊 大丈夫、必ず助かる。
 文治 みんな、諏訪湖にでるんだ。あわてるな。
 五六郎 「火消し」はどうした？まだ来ないのか。
 オセツ ここに住んでるもんはみんな邪魔者にされてるんだ。
 オサト 火消しなんて来てくれないよ。
 五六郎 そんなバカな。
 その時、柱の倒れるような大きな音。平汰が飛び出して来て。
 平汰 五六郎！手を貸してくれ。熊が倒れた柱に挟まれた。
 五六郎 なに？熊が。

五六郎上手へ。

お梶　なんでこんなことに・・・。
オサト　なあ、なんであたいたちだけ、こんなひどい目に会ったんだ？
オセツ　ちくしょう。

そこに白猫が怪しく現れる。

白猫　なんだおまえたち。まだ生きておったのか。
お梶　おめえは・・・。
オセツ　こいつこの前のヤツだ！

白猫、刀をサヤから引き抜く。

お梶　そうか！おめえの仕業だな。
オセツ　このやろう！
オサト　もう許さねえ！
白猫　誤解をするな。このような村に用はない。

白猫、お梶を睨んで。

白猫　おまえ。
お梶　えっ？
白猫　オシはお前に用がある。

白猫は言うが早いかお梶に切りかかると、お梶はするりと逃げて、
落ちていた木の枝を拾う。とっさに構えるお梶。

白猫　ほほう、何の真似かな？

お梶、木の枝を振り払うと、眠っていた剣士の記憶が体に蘇る。目つきも変り、まるで風のように白猫に切りかかる。殺陣。

白猫　なかなかやるようだな。

白猫とお梶の激しい死闘。しかし押されぎみのお梶。それを助けようとオサトが白猫に抱きつく。

オサト　お梶ちゃん、にげろ！
お梶　やめろ！オサト！

震えながら木の枝を構えるオサト。そもそも剣の心得のないオサト。簡単に腕を取られ組み伏せられる。

お梶　オサト！

オサト、あえなく切られる。

お梶・オセツ　オサト！

白猫、なおもオセツを切るうとして。

為一　オセツ！
お梶　・・・。

白猫、為一の利き腕を切る。

為一　うううっ。
オセツ　あっ！

(取り乱しながらも白猫に挑む) ああああっ！

殺陣 お梶と白猫、戦う。とうとうお梶、白猫に追いつめられて。
殺すには惜しい腕前だ。

白猫、お梶に刀を振りかざす。お梶も覚悟を決める。そこに着流しの侍。信さんだ。すんでのところで白猫に小刀を投げるが、なんなかわされる。

信さん
白猫
お主には関係のない事。

殺陣 燃え盛る炎の中続く。しかし、圧倒的に強い信さん。とうとう白猫を追いつめて。

信さん
白猫
信さん
健四郎。大熊健四郎か。

殺陣。

白猫
信さん
十郎左衛門、うまく殿に取り入ったもんだな。

白猫
信さん
なぜ、このこのようなことを！
なぜ？我がが他に、どのような生き方があったというのだ。
何！

殺陣。

信さん
白猫
金で雇われているのか。
キサマとて同じ事。

やがて白猫、十郎左衛門から離れると刀をおさめる。

白猫
信さん
今日のところはお預けとしよう。
待て、健四郎！

白猫、火の中に逃げてしまった。

信さん
くそお。

信さん
（信さん、切られたオサトの様子をうかがうが、すでに息をしていない）・・・ひでえことしやがって。
オサト・・・。

お梶
お梶、オサトに駆け寄り、抱き起こそうとする。が、ぐったりと倒れてしまうオサト。

オセツ
お梶
オサト！
・・・なんだよオサト。おまえ、オレを守ってくれるって言ったじゃねえか。

しかし、オサトは答えない。

お梶
・・・なあ、ずっと守ってくれるっていったらどう。なあ、オサト！
・・・オサト！

そこに五六郎。オサトの手を取り無言で涙を流す。五六郎、イカリをこらえ切れず。地面をたたきつけ嗚咽する。

五六郎
うつつうおおおおおつ！

しかし、お梶の叫びも、五六郎の嗚咽も、燃え盛る炎にかき消された。

転換

一幕(三場) 有賀村

作業はつづく。舟を押す者。モッコを担ぐ者。そこに北齋の姿。為一とフラフラになって、皆の後をついていく。五六郎それを見付けて。

五六郎 じいさんは力仕事はしなくていいよ。作業が計画通りいってるか、掘った深さを計ってくれりゃいい。

北齋 人を年寄り扱いするな。まだまだ若いもんには負けん!

為一 ずいぶん人足が減ってしまいましたね。

五六郎 ああ、弁天さまと祟りだとか言い出すヤツが増えてな。中にはこの工事に関わると命を落とすなんて言い出すヤツも出てきた。

為一 五六郎さん。

五六郎 諦めやしねえ、諦めはしねえけどよ……。

北齋、フラフラになりながらも、作業を続ける。

五六郎 気だけは強えようだな。

為一 負けず嫌いなんですよ。そうじゃなきゃあの歳で旅なんかできませんよ。

五六郎 それよりおメエたち、こんな田舎に何しに来たんだ。

為一 …… 私たちは、浜中島と弁天島の絵を描きに。

五六郎 浜中島の……。そりゃあ悪いことしたな。いえ、気にしないでください。先生は他に書きたいものを、この諏訪の地で見つけたようですから。

五六郎 訪の地で見つけたようですか。

為一 たいしたもんだ。もう七十近けえだろ。

為一 七十二ですよ。もやは化け物です。

為一 先生、辛いと思います。オサトちゃん、先生にすっかりなついてましたからね。

五六郎 ……まったくだ。

北齋がもくもくと作業をしている。時折目に手ぬぐいを当てている。(泣いている)

為一 風景だけを描いても意味がない。そこに住む人の生き様を盛り込むことができればって。

五六郎 生き様を盛り込む? 浮世絵にか?

為一 天才です。とても私が得られる世界じゃない。

五六郎 へえ。

為一 見ててごらんさい。後の世に残る名作が生まれますよ。

五六郎 この諏訪湖でか。

為一 そうです。

五六郎 ……。

為一 だから五六郎さん。負けちゃいけませんよ。ここに集まってる村人は、あなたを信じているんですからね。

五六郎 ……だいたいが。

信さん オセツが遠くでこちらを見ている。為一それに気がつきオセツに近づく。オセツの気持ちを探る為一。

シズ 信さんが五六郎に寄り添う。そこに信さんやって来て。

シズ 火事の犠牲者は裏山の寺に葬った。

お梶、白い風呂敷を二つかかえてやってくる。信さんは部屋の中へ。お梶は庭に佇んでいる。後ろからオセツと為一も見守っている。

お梶 お美緒ちゃん。

シズ ……おシズさん、こいつらという間は、お梶でいいよ。

シズ ……ああ、わかったよ。

信さん 家や田畑を失った者たちが、何百人と暮らしておった。女子供もおつてな。ひどい暮らしぶりだ。

シズ お茶でも入れましょう。

信さん すまんな。

お梶 お梶、オサトのお骨を抱きしめて。

信さん 高島城の侍たちはバカだ。えっ？

お梶 貧乏人のことなんか、何もわかってない。大きなお城でふんぞり返ってるんだ。

信さん ……。

お梶 あたいらのことなんて…。(涙) 目にもとまらないんだ。涙を必死にこらえるお梶。信さん、庭に降りて、お梶の肩をそっと抱く。

信さん ……すまん、すまんな。

信さん、自分の不甲斐なさに心を傷める。そんな信さんを見て。

お梶 へんな信さん。べつにあんたのせいじゃないよ。

信さん ……。

そこに五六郎がやってくる。

五六郎 信さんよ。火事で焼け出されたもんが裏山の寺に移動するんだ。手伝ってくれねえか。

信さん ああ、承知した。

お梶が気になる信さん。そこに一人の侍がやって来て控えている。信さんそれに気がついて近寄る。

侍 お奉行。

信さん 食料の手はずはついたか。

侍 はっ。米十俵と塩を運ばせました。

信さん ご苦労。

侍 それから、此度の一件、影で勘定奉行の鬼頭どのが関わっております。

信さん 良からぬ噂をたて、諏訪家を追いつめるつもりか。

侍 すでに本丸の不祥事と城内が騒がしくなっております。

信さん そのまま監視を続けよ。そのうち尻尾を出すだろう。

侍 はっ。(去る)

鬼頭め、とうとう動き出したか。

信さん、厳しい表情で去る。

お美緒 ……五六郎。

五六郎 オサトちゃん。丁重に葬ってやろうな。

お梶 ……ありがとう。

五六郎、目の前にひろがる諏訪湖を見て。

お梶 浜中島撤去のもう一つの目的は、無宿人や浮浪者を助けることだった。一日、二升五合。これだけあれば、飢えた村人がなんとか生きて行ける。

お梶 ああ。みんな喜んでいたよ。五六郎は生き神さまだって。何が生き神さまだ…オレはその連中を守ってもやれなかった。…いや、オレのせいだ。オレが変な噂を立てたばかりに…恨みを買っちゃったんだ。

五六郎
お梶

そんなことあ些細なことだ。このボンクラ頭のせいなんだよ。
五六郎。
良い事だと押し進めて来たことも、中にはそれが迷惑だと感じる者もいるってことだ。オシはそれをないがしろにしてきた。その結末が夕べの火事だ。オシは沢山の人を犠牲にしちまった。

そこにシズお茶を持って現れる。

お梶

なに言ってるんだよ五六郎。確かに始めのうちは、こんな途方もないこと出来るわけがないと思っただよ。迷惑だとも思った。だって、どんなに偉い人だって、金持ちだって、諏訪湖の大水をとめることはできなかったんだから。でもさ、あの舟に沢山の土を積んでる姿を見て、みんな希望を持ち始めたんだよ。もしかしたらうまく行くんじゃないかって。だから、いつかきつと、みんなもわかってくれる。誤解をしてた連中も考えを変えてくれるよ。少しづつかも知れねえけど。そうじゃなきゃ、死んでいった奴らが浮かばれないよ。

シズ

そうだよあんた。この子のいう通りだ。鳥を削り取るなんて芸当を、世の中の誰ができるっていうんだい。あんたがビシツとしなきゃ、ついてくヤツも、ついて来ないよ！

お梶、白い包みを抱きしめながら。

お梶

「喜びを分かち合えば倍になる 分かち合う人がいればそれが幸せ」
そうだよな、オサト。

五六郎

「喜びを分かち合う・・・」か。へっ、子供に教えられちゃったなあ。

シズ
五六郎

身にしみただろ。ほら！お茶でも飲んで目を覚ましな！
ああ。（お茶を飲む）あああ、うめえ！このお茶はまた格別うめえな。（涙）

シズ
五六郎

あんた、この荒れ果てた沼地が田んぼになるんだろ。
ああ、だだっ広い田んぼに生まれ変わる。秋には一面、黄金色の稲穂が風にザワザワと揺られるだろうよ。

シズ

目の覚めるような景色になるだろうね。・・・死んだ人たちも、さぞかし喜ぶよ。

五六郎

ああ。墓前に積み切れねえほどの握り飯、供えてやらあ。
そこに平汰、文治、熊、オヨネ、オキヨがやって来る。

皆

五六郎！

ぞくぞくと村人が集まってくる。闘志みなぎるその姿に答えて。

五六郎
平汰

平汰、舟が通る水路を開けたか。
ああ、一溝を文治の方まで深く掘り下げたぜ。

文治
五六郎

後は堰を切って諏訪湖の水を流し込めば水路の出来上がりだ。
よし、堰を切れ。舟を通すぞ。有賀村の奥から埋め立てる。

皆

おお！

文治と平汰。鋤をたてて堰を壊す。けたたましい音を立てて水が流れ出す。

平汰
五六郎

五六郎！
舟を通せ。

皆

おお！

そこに為一とオセツ。その情景を見て感動する。ぎぎぎ！と船。

為一
オセツ

見るオセツ。大舟が陸を登って行くぞ。
オシ、こんなの初めて見た。すげえ、すげえよ。

その時、見ている者たちに大舟の影がゆっくりと横切つてゆく。目の前を舟が登つてゆく有り様を舟の影が描く。

為一 オセツ、俺たちにも何かできないかな。

オセツ えっ、オしたち？オしたちって……。

為一 賭けてみてえんだ、あの途方もないアホウに。

オセツ ああ、一緒にやろう。

弾みで手なんか握りあうが、すぐに離して。

為一 お触れを書いたらどうだろう。諏訪中に貼りまくるんだ。

オセツ いいね。きっと村人が集まってくれるよ。

為一 よし。

為一、背負つたいた箱を降ろすと筆と紙を出す。字を書こうとして。

為一 くそおお、思うように動かねえ。

オセツ ごめんよ。あたしのために利き腕を……。

為一 気にするな。こんなもん……（痛む）うっ。

そこに北齋やってきて。

北齋 どれ、ワシが書こう。

為一 先生！

北齋 「浜中島掘削に参加されたし 一日二升五合の米を与える」

オセツ じいさんは字もうめえな。

北齋 だからワシは……。

為一 先生、ありがとうございます。

北齋 うむ。これを摺り師のところを持って行きなさい。半日もあれば千枚は刷れるだろう。

為一 はい。

北齋

それから、せうせうせうせうで、葛飾北齋と。これを高島藩、前守、守矢宗則どのに届けて来なさい。

為一 守矢さまとは？

北齋 諏訪大社、御柱の総代じゃ。このような老いぼれの文でも、何かの役に立つやも知れん。

為一 ……北齋先生。

北齋 為一、よく見ておきなさい。彼の地に暮らす、人々の生き様を。

為一 はい。

北齋

為一、オセツとともに走りさる。北齋空を見上げて。

北齋

……諏訪の民が一つになれば、この工事は必ずうまく行く。諏訪の明日は諏訪人の手で築くのじゃ。

暗転

一幕（四場） 高島城

鬼頭村之介と成金屋為五郎が話しをしている。白描が傍に控えている。

何！工事が進んでおると。

はい。先日の火事もかえって村人のやる気をおおってしまったようです。

鬼頭 くそおお。なぜ怯えん。奴らは皆死にたいのか？

成金屋 人足も五千人ほど集まってしまいました。もともも見積もりは一万

五千のハズ。とても期限内に終わりはしないでしょう。

鬼頭 十郎左衛門め、裏で五六郎を支援しているようだが、目にモノをみ

せてやる。村人に金をつかませて工事の邪魔をさせる。この工事、

何としても失敗に終わらせるのじゃ。

白描 お任せを。

鬼頭 お主のような者が、のうのうと生きていられるのは、いったい誰の

お陰だと思っておる。今度こそしくじるなよ。

白描

鬼頭 さぞ、十郎左衛門が疎ましいであろう。同じ呪われた二之丸家の血

筋。うち捨てられた家臣の恨み、今こそ晴らすのだ！

白描、無言で頭を下げると去る。

成金屋 鬼頭さま、実はわたくしめにも一つ良い考えが。

鬼頭 ほほう、聞かせてみる。

成金屋、鬼頭に耳打ち。

鬼頭 なるほど、それは面白いな。

成金屋 さすれば、工事は頓挫しましょつ。

鬼頭 成金屋、お主は、まっことまっこと、本気でスペシャルな悪よのう。

成金屋 お奉行さまこそ。

二人 わっははははは。わっはははは。

鬼頭 あっ……。

成金屋 どうかなさいましたか？

鬼頭 八ゴが、はふれら。(アゴがはずれた)

成金屋 鬼頭さま、笑いすぎですよ。

鬼頭 ほづらな。(そうだな)

二人 わっははははは。わっはははは。

暗転

二幕（五場）釜口の排水口付近

激しい雨。それでも工事を進める五六郎。夕暮れ。

五六郎 いいか。舟を水の流れに取られるな、杭でしっかり固定するんだ。

そこに平汰と文治。

平汰 五六郎、戻ったぞ。

五六郎 ご苦労だった。有賀村の方はどうだ？

文治 順調に行ってるよ。三町歩ほど埋め立てが終わった。ただ、人足たちが大分疲れて来てるようだ。

五六郎 毎日、この重労働だ。それにこの雨じゃ体がもたねえ。今日の仕事は終いにしよう。

平汰 わかった。皆に伝えて来る。

平汰去る。雨が激しくなる。

文治 五六郎。まだまだ、人足が足りねえ。どうにかならねえのかな。

五六郎 ああ、今、村の名主たちに声をかけてるところだ。

文治 このままじゃ人足がへたばちちまう。

五六郎 ああ、わかった。

そこに、太い縄を引っ張って信さんとお梶がやって来た。

信さん 五六郎！水の流れが早くなった。どこかにこの縄を縛って、舟を固定したいんだが。

お梶 足元がぬかるんで舟を繋いでおけないんだ。

五六郎 ああ、わかった。その杭はどうだ。よし貸してみる。

五六郎、縄を受け取ると、太い杭に縄を縛りつける。

お梶 五六郎、さっき高島の侍が来て、米を百俵、荷車で積んで来たぞ。

五六郎 ありがてえ。高島の殿さんはやっぱり話しのわかる人だ。

お梶 ああ、オしも少し見直したよ。

信さん はははは。そうか。見直してくれたか。

お梶 まるで信さんが、諏訪の殿さんみてえな言い方だな。

信さん えっ？ああ、そうか。すまんすまん。

皆で笑う。

五六郎 そういうなお梶。こいつがいなきや、ここまで来られなかった。感謝してるんだ。

お梶 そうだな。ありがとう。信さん。

信さん よせよお梶。背中がムズムズするだろう。

飯場のすみに仮のホコラ。そこに置かれている弁天さま。

信さん あの、弁天さんのご加護じゃねえのか？

五六郎 そうだな。

お梶 あの弁天さんに出会ってから、不思議なことばかり起るんだ。

信さん あれは高島城築城の折りに祀られた由緒あるものだ。俺とあの女を引き合わせてくれたのも弁天さんだ。

五六郎 ああ、前に聞いた、離れ離れになったって話しか。

お梶 離れ離れ？

そこにシズ、オヨネ、オキヨ。番傘をさして、荷車に鍋を積んでやってきた。

シズ あんた。暖かい「すいとん」を作ったよ。

オキヨ みんな腹を空かせてるだろ。

オヨネ これで精がつくよ。

五六郎 ありがてえ。こりやうまそうだ。人足を集めて労をねぎらってやってくれ。

信さん よし！オヨネ、オキヨ。こっちへ頼む。

オヨネ・オキヨ あいよ。

オヨネ、オキヨは荷車を引いて去る。

シズ お美緒ちゃん。

お梶 えっ？

シズ、後ろからついてきた女の子を連れて来て。それを見ている信さん。

シズ もうそろそろ、お美緒ちゃんていいたろう？ほら、この子がお前に会いたって。

お梶 ……えっ。

その女の子はお悠。お悠がお美緒の前にかけて寄って。

お悠 ……ねえちゃん。

お梶 おまえは…。

シズ二人にはほほ笑みかけ五六郎の元に近づく。辺りはすっかり暗くなって、空には月が雲間から現れた。遠くで聞える賑やかな声。ほんのりと明りも見える。オキヨたちが人足に「すいとん」を振る舞っているらしい。それを、笑顔で見ている五六郎。

シズ おまえさん、やだねえ、びしょぬれじゃなか。

五六郎 かまやあしねえ。みんな一緒だ。

五六郎、シズの髪を手ぬぐいで拭いてやる。信さんその姿を見て行

こうとするが。

五六郎 ……シズ、ちょっと話したいことがあるんだ。

シズ、五六郎の物言いにすべてを察して。

シズ お金のことかい？

信さん、シズの言葉に身を隠し話しを聞く。雲間から月がのぞく。

シズ もう売る田畑なんかありゃしないよ。

五六郎 ……そうか。

シズ こうなったら、家を処分して…。

五六郎 それじゃあ、おめえに迷惑がかかる。

シズ 今さら何言ってるんだい。

五六郎 ……すまねえな。俺が甲斐性がねえばかりに。

シズ また、稼げばいいじゃないか。

五六郎 すまねえ。

おまえさん、あたしや、あなたと一緒にだよ。

信さん。二人の会話に心を傷める。月を見上げて。

信さん 五六郎、心配するな。おめえを見捨てるようなことはしねえよ。

お梶とお悠が何かを話している。五六郎とシズ、二人を見て。

シズ でも、佳代さんも可哀相なことしたね。あの子たちを残して死に

五六郎 まうなんてさ。

シズ ……ああ。

五六郎 佳代さんには、あたしが芸者にならたてのころ、ずいぶん世話になっ

たんだよ。ちょうど、あたしがお座敷に上がれるようになったころ

かね。佳代さんに男ができたんだ。お似合いだったね。まるで、お雛さまのようだった。

五六郎
それがあの二人の父親か。

シズ
ああ、一緒に暮らすようになって7年くらいたったかね。その男が、

高島藩のえらい侍だってわかってね。身分違いつてことで、泣く泣く引き裂かれたんだよ。

五六郎
いつてえ誰なんだ、そのえらい侍つてのは。

信さん、その話しを聞いて表情を変える。

信さん
・・・その話しは本当か！

シズ
信さん。・・・ああ、こんなところでウソ言っただってしょうがないだろう。

五六郎
なんだよ信さんよ。神妙な顔しちゃってさ。どうかしたのかい？

信さん
・・・佳代。

五六郎
えっ？

シズ、信さんの顔を良く見て。

シズ
えっ？そういえば信さん、あんた・・・。

その時、飯場に置いてあった弁天さまがグワンと光出す。お梶のフラッシュバック。

「怪しい影が二人の女を川淵まで追いつめる。一人の女を切る」

お梶
母上。

「もう一人の女。切られた女を抱いて川へ飛び込む」

お梶
母上！母上！

フラッシュバック終了。お梶。その場に倒れる。

五六郎
おい！大丈夫か！

お悠
ねえちゃん！

信さん
おい、しっかりしろ！

ほどなく目覚めるお梶。記憶がもどっている。（お梶↓お美緒）

お美緒
・・・。

お悠
ねえちゃん。

お美緒
・・・お悠。

お悠
ねえちゃん。思い出してくれたんだね。あたいのことわかるんだね。

お美緒
お悠。お悠。（お悠に抱きつく）

五六郎
正気をとりもどしたのか？

シズ
・・・よかったねえ、おまえさん。

信さん、震える手で、二人の肩を抱く。

信さん
・・・お美緒、お悠。

その時、大きな爆発音と土砂の崩れる音。

五六郎
何だあの音は！

信さん
釜口の方からだな。

舟を繋ぎとめていた縄がぐいぐいと引かれる。

五六郎
舟が流されてる。

信さん
しまった。杭がもたねえぞ。

キリキリと音を立ててボキッと折れる杭。縄が杭ごと引かれて行く。

五六郎

くっそお！

五六郎と他の者たち全員、縄の引かれて行く方にハケル。

そこに成金屋為五郎。誰もいなくなつたのを確認すると、仮のホコウに祀つてあつた弁天さまを盗み出す。

成金屋

へへへへ。この弁天さえ手に入れば、こちらの思つっぽ。

成金屋、弁天を抱き、ご機嫌な調子で去っていく。

二幕（六場）大舟を流すな

左右上下に揺れる大舟。（何とかお願いします）杭に繋がれた縄も切れかかっている。五六郎、縄を握り、自らも引つ張る。

五六郎 こりやいけねえ。舟が流される。

村人たちのざわめき、悲鳴。けが人をして運ばれる者。顔を血で染める者。足を引きずりながら助けを叫ぶ者が次々とやって来る。

平汰 五六郎！大変だ。浜中島の土砂が崩れて、天竜川に流れ込んでる。一体、何かあったんだ。

文治 わからねえ。何か砕け散ったような音がしたようだが。

シズ このままじゃ、舟が押し流されちゃうよ。

平汰 いったいどうすりゃいいんだ。

五六郎 そうはさせるかよ。

五六郎、縄を体に巻き付けグイと引つ張る。ゴゴゴツと舟が傾く。

信さん おい、文治と後の者は五六郎を手伝ってやれ。平汰はオレについて来い。川下の村にこの事を知らせるんだ。

平汰 わかった。

信さん みんな頼んだぞ。

村人たちの声 おお。

五六郎 くっそう、この舟が川下に流れたら村が大事になるぞ。

シズ お前さん！

お美緒 五六郎。

五六郎 みんな、そっちの方にありったけの杭を打ってくれ。この杭じゃも

たねえ。

シズ わかったよ。さあ、みんな！

村人たち おお！

シズとお美緒とお悠。数人の村人と一緒に杭を打ち付ける。五六郎、一人の怪我人をみつけ声をかける。

五六郎 おい。佐吉じゃねえか、大丈夫か！

様子のおかしい佐吉。

五六郎 しっかりしろ。．．．おい！佐吉。おめえ、火薬の二オイがするな。

はっと五六郎から離れる佐吉。五六郎、その様子をみて。

五六郎 佐吉！おめえまさか！

佐吉、やおらひざまついて。

佐吉 五六郎！すまねえ。．．．オラ、とんでもねえことしちゃった。

五六郎 なんだと！じゃあ、こりゃあ、おめえの仕業か！

いつまでこんなこと続けるつもりだ。浜中島を削り取ったって、諏訪湖の水は少しも減りゃあしねえじゃねえか！

五六郎 そんなことあねえ。オレを信じろ！

このままじゃみんな潰れちゃう。．．．弁天さまの祟りだよ。みんな死んじゃうんだ。

そこに白猫。佐吉を睨んで。

佐吉 おい、金をくれよ。言われた通りにしたんだ。なっ、金をくれ。

白猫 お前は少々喋りすぎだな。

白猫、佐吉を切り捨てる。

佐吉
五六郎
がああああ。・・・五六郎！
佐吉！（白描に）てめえ、何をしやがる。

そこに浪人風の侍が二人。杭を打っていたシズ、お美緒、お悠を囲む。村人たちは逃げてしまった。

シズ
あんた！

五六郎
おめえたちはいったい誰だ。

白猫
五六郎
農民出の分際で、過ぎたまねをするからこういうことになるのだ。何？

その時、縄がキリキリと高い音を出したかと思つと、杭の根元が「ビシッ」と折れてしまふ。「ゴゴゴッ」と唸りをあげる舟。

五六郎
しまった。

五六郎、外れた縄を腕に巻き付け、（上手）新しく打った杭にしがみつく。

シズ
あんた！

お美緒
五六郎！

五六郎
舟を流しちまう訳にやあいかねえんだ。

白猫
ふふふ、丁度よい。舟と共に、激流に吞まれる。

そのとき、お美緒が一人の刀をつばい、風のごとく剣を走らせる。

侍1
うああああ。

侍2
うああああ。

白猫
しまった。

白描とお美緒の死闘。ところが、そこに、高島城の家来が数人、鬼頭と成金屋が駆けつけてくる。

家来
ええい、静まれ静まれ。高島藩勅定奉行、鬼頭村之介さまであるぞ。静まれ！

鬼頭、前へでてくる。沢山の役人がお美緒を囲む。観念するお美緒。

五六郎
こちらら、それどころじゃねえんだ。

家来
有賀村の伊藤五六郎だな。神妙にいたせ。

五六郎
なんだと！

その方。浜中島を撤去するをいいことに、浜中島の弁財天を江戸藩中の商人に売りさばこうとしていたことは明白。盗まれた仏像の売買は御禁制と知っての行いか。

五六郎
俺はそんなこたあ・・・。

鬼頭
ええい。口答えをするな。ここにある弁天が立派な証拠。

成金屋、弁天さまを持っている。

五六郎
これはいつとき、俺が預かっているもんで。

成金屋
ウソをつけ。それをお前が売りさばこうとしたと、言っているヤツがいるんだ。

鬼頭
おい、その者を連れて参れ。

連れて来られたのは、熊。随分ためつけられたのだろう。その後ろにオヨネもいる。震えるオヨネ。

熊
五六郎。すまねえ。

お悠
おじさん！

オヨネ
お悠ちゃん！

五六郎
くそお！理不尽なことしやがって。

鬼頭 以上、申したことに相違ないな。

熊 ……はい。(泣きくずれる)

五六郎 ……熊。

鬼頭 よし、皆の者、こやつらを引つ捕えよ。

家来たち はっ！

五六郎 てめえら！

しかし、五六郎は繩を離そうとはしなかった。キリキリと締めつける繩。ゴゴゴツと舟が軋む。絶対絶命。その時。

信さんの声 とうとう尻尾を出したか。鬼頭村之助！

鬼頭 ん？

信さん、あらわれて。

信さん いや、なかなかの大芝居。市川團十郎もタジタジだな。

鬼頭 何だと？キサマ、何ヤツ！

信さん ガタガタぬかしてんじゃねえや！てめえらのためにな。どのくれえ

の民百姓が泥を食い、血の涙を流したと思ってるんだ。

なにを！ええい無礼千万！コヤツを取り押さえる！

はっ。

信さんを囲む家来たち。

信さん 毒をくらわば皿までか。おもしれえ、ちよっと肩慣らしでもさせて

もらうか。

信さん、刀を抜くと刀の刃を裏返す。家来との殺陣。圧倒的に強い信さん。5人ほどの家来をなんなく打ち負かす。家来バタバタと倒れ腰を抜かして後ずさり。信さん、頭に巻いた手ぬぐいを取り外すと。

信さん おめえら、俺の顔を見忘れたか。

はっと気づく家来たち。

家来1 こっこれは…お奉行さま！

鬼頭 なっ何？十郎左衛門か！

それを聞いた五六郎やシズ、お美緒やお悠が驚く。

五六郎 何？おめえ信さんって。えっ？お奉行？じゃあ、あんときの！

シズ 十郎さんかい。あんたやっぱり！

五六郎 おらあ、とんでもねえヤツをこき使っちゃまった。

信さん 氣にするこたあねえ。お陰で諏訪の鬼退治ができそうだ。

鬼頭 なぜキサマが、このようなところに。

成金屋 鬼頭さま、どうするお積りですか。話しが違います。

鬼頭 お主が言い出したことだろう。お主が何とかせい！

成金屋 そんな無茶な！

信さん キサマ、町奉行職にありながら、藩の許可した工事を妨害したあげ

く、尊い村人の命を虫けらのように殺し、揚げ句の果てに、私財ま

で投げ打って諏訪の為に人力するこの五六郎を、罪人にしたて投獄

するつもりか。どこまで性根の腐った古ダヌキだ。

鬼頭、もはやこれまでと。

鬼頭 ええい、皆の者、此奴は狼藉者だ。

信さん なに？

鬼頭 謀反じゃ。二之丸家の謀反じゃ。切り捨てい！

家来3 しかし…。

鬼頭 かまわん、ワシの命令じゃ。

家来 ……。(躊躇する家来)

鬼頭　ええい、何をしておる。こやつらを切り捨てい！
家来たち　・・・出来ませぬ。

家来、刀を納め逃げていく。

信さん　家来は、えせ物を良く知っているようだな。
うつつうつつ、もはやこれまで。十郎左衛門、覚悟！
鬼頭

鬼頭と白描を相手に向き合う二人。鬼頭と信さん、手前で刀を合せながら奥へともつれ込む。白描とお美緒の戦い。戦いながらセリフ。

お美緒　キサマ、なぜ母上を切った。

白描　フツ、金のためよ。

シズ　えっ、それじゃあ、佳代さんは殺されたんだ。

五六郎　なに！くっそおお。なんてことを！（縄が締まる）うっ！

「ゴゴゴツと舟が唸る。五六郎を襲う白描。それに立ち向かうお美緒。信さんも、鬼頭と向き合って。四人の死闘。その内、上手に五六郎側、下手に鬼頭側と別れる。」

信さん　健四郎、なぜそのようなことを、我らは同士ではないか。

白描　十年前、お主が殿の命により高島に登城を許されてからは同士ではない。
信さん　俺は片時もお主らのことを忘れたことはないぞ。

白描　口では何とでも言える。だが、事実は違う。

白描、十郎左衛門に切り込む。互角の二人。

信さん　確かに俺は家族を残して高島に登城した。だが、残された家族は藩

とは無縁のもの。なぜこの期に及んで、佳代の命をつばった。落ちぶれていたとはいえ、あの女が武家の血筋だからよ。

お梶　・・・なんだと。
鬼頭　キサマに跡目ができては何かと都合が悪いんでな。
信さん　・・・酷いことを。
お美緒　くそおお。

四人の死闘。合間、背を合せ鬼頭と白描を牽制する信さんとお美緒。

信さん　お前は記憶を失いながら、なぜお梶と名乗った。

お美緒　お守りだよ。この中に入っていたんだ。
信さん　その中に？

「またも入替りながら信さんとお美緒と戦う。合間、もう一度、二人は背を合せて。」

信さん　そのお守りの中に何が入っていた？

お美緒　梶の葉だよ。梶の葉の絵だ。
信さん　ははは、そうか、梶の葉の絵か。それでお梶と名乗ったのか。

「四人の死闘。今度は鬼頭と白描を真ん中に詰め寄り、信さんとお美緒が両側から追いつめる。信さんとお美緒、離れたまま。」

信さん　お美緒、それは絵ではない。家紋だ。

お美緒　家紋？
信さん　梶の葉は、諏訪家の家紋だ。

お美緒　どうしてそんなもんが？

殺陣　「信さんとお美緒」が「鬼頭と白描」と戦う。センターで鬼頭と白描を威嚇しながら。

信さん　お美緒、なかなかの腕前になったな。

お美緒　えっ？

信さん　なんだ、師匠の顔を忘れたか。

お美緒　・・・師匠？

信さん　まあ、忘れてもムリはない。お前はまだ7つであった。

お美緒　・・・父上。

信さん、二三度刀を合せると、鬼頭の刀を奪い、後ろ手にくい打ちのように刀を地面に刺す。身動きが取れなくなった鬼頭。

鬼頭　白猫、遠慮はいらん、切り捨てい！

白猫　ああ。

なぜか様子が違う白猫。片手には浜中島の弁天を握っている。

白猫　ごさかしい。

殺陣。

白猫　諏訪の民を救うだと。ふふふ、笑わせるな。

白猫、五六郎を狙う。ゴゴゴツと舟が軋む。苦痛に顔をゆがめる五六郎。

シズ　おまえさん。死んでも縄を離すんじゃないよ。

五六郎　ばかやろう！わかってらあ！

白猫、信さんとお美緒の刀を「ガンッ」と受け止めて。

白猫　古来より、諏訪の海は龍神の住まう聖域。お前らのような不埒者に何ができる。

信さん　おい、胸に染みるな。（五六郎に）

五六郎　ばかやろう。なに納得してんだ。

舟が軋む。力を入れる五六郎。五六郎をしっかりと抱き留めるシズ。白猫、もう一度二人の刀を「ガンッ」と受け止めて。

信さん　オサトはいい子だったよ。

白猫　そこがその虫けらの死に場所だったまで。

信さん　バカにつける薬はねえな。

お美緒　許さねえ！

お美緒の刀が白猫を襲う。難なく受け止める白猫。

白猫　うぬぼれるな。もはや、息絶えた二之丸家に、この諏訪の行く末、見定めることなど出来はせぬ。

信さん　健四郎。恥を知れ。

ふっ、我らは生まれながらの亡者。この世に憐れながら生きてゆく運命だ。ならば、その遺恨、獲って食らうまで。

三人の死闘。白猫、信さんとお美緒を振り切って。五六郎を狙う。

白猫　所詮この世は金と力。領民はさしずめその食いぶちだ。そうとも知らず、つまらぬ夢など見おって。虫けらならば、それなりの生き方があろうものを。

信さん　それは、おめえ自身に言ってることか？

白猫　何！

白猫、五六郎に刃を向け飛びかかる。

愚か者めが。ものの道理を知らぬまま死ね。

その時、弁天が唸りをあげる「グワン」眩しい光が白猫を襲う。

白描 うっ、なんだこれは！

白描、握っていた弁天を落とす。その光に引き寄せられるように五六郎、杭を放し、縄を持ったまま弁天を捨てる。「ぎぎぎぎぎぎ」と唸りをあげる舟引き寄せられている。

五六郎 信念ってヤツかな。こつ、体が動いちまうんだよ。

ぎぎぎぎと舟が水に押し流される。引きずられる五六郎。五六郎、鋤を地面に振り降ろし動きをとめる。

五六郎 そうしろってな！

五六郎、それでも舟に引きずられる。

シズ あんた！

お美緒 五六郎！

シズとお美緒が五六郎にしがみつく。しかし、水の流れは強い。三人が引きずられる。「すすすす」そこに高島城の家来たち。それまで様子をうかがっていたが。

家来たち 助太刀いたす。五六郎！（それぞれ叫ぶ）

何とか舟を動きをとめる。白描、かまわず刀を振りかざす。

白描 バカどもめが！

それをすんでのところで止める信さん。白描と信さん、2・3度刀を交わす。そして、とうとう信さんの刃が白描の腹を刺しいぬく。

白描 うっ！

信さん、泣いている。

信さん 健四郎……。

白描 ……卑しき者の定めか。

自分を卑しいなんて言うもんじゃねえ。もし、そんなもんあるとすれば、人の弱みを食い物にして、力と欲に魂を抜かすヤツをいうんだ。

白描 相変わらずお人良しだ。

信さん お主……なぜ、武士の魂を捨てた。

白描 ふふふ……笑わせる。

信さん なに？

白描 ……その先にいったい何があった。

白描、最後の力を振り絞って信さんの刀を奪い自らの首を切る。白描の最後、白猫、諏訪湖に消える。信さん、腹の底から絞りだすような声で。

信さん ……健四郎！

すでに白描の姿はない。窮地に立たされる鬼頭。

鬼頭 たっ、たわけ！

信さん 鬼頭村之介。もはやお主の立つ瀬はない。

鬼頭 なに！

追って沙汰を出す。（家来にむかって）誰かおる。

信さん はっ。

家来 此奴を引っ立てい！

信さん はっ。

やめろ！おまえら。ワシを誰だところろえる。ええい、放せ。放せ

という。

お美緒、無言で鬼頭に近づき殴る。鬼頭、家来に連れていかれる。
お美緒とお悠、十郎左衛門にすがりつく。十郎左衛門の胸を二三度
たたき、泣き崩れるお美緒。(信さん↓十郎左衛門)

十郎 二人とも、大きくなった。長い間、不憫をかけた。すまん、すまん
な。

お美緒 父上、お聞かせください。父上はなぜ、高島にお仕えしているの

すか？なぜ家来たちを、家族を捨てたのですか！

十郎 この身、幾万の鬼に切り刻まれようと、許されるものではない。

十郎左衛門、我が子を見据えて。

十郎 だがな、大義は守らねばならぬ。たとえお家断絶となろうとも、そ
れを失えば己の魂もまた失う。

お美緒 ……父上の大義とは、いったい何ですか？

十郎左衛門、しっかりと諏訪湖を見つめて。

十郎 この諏訪の行く末、見据えること。

お美緒 ……

お悠 ……

父の覚悟を知るお美緒とお悠は泣き伏す。十郎左衛門は涙をこらえ
ながら我が子をしつかりと抱きしめた。

気がつく、いつの間にか舟の唸りも水の流れもなくなった。

シズ あんた、見てごらんよ。諏訪湖の水が引いてるよ。

五六郎 ……

五六郎、諏訪湖を見つめて。

五六郎 釜口が大きく口を開いたんだ。見る、さっきまでそこにあった諏訪
湖の湖面があんなに遠くに。

シズ あんたの言った通りになったね。

五六郎 ああ。

皆で、難局を乗り越えたことに安堵する。その時、鋤やクワを持っ
た百姓(十人くらい)が五六郎たちを取り囲む。

シズ なんだいあんた達は。

五六郎 川下の連中だ。これだけの水が一気に流れ出しゃあ、村はひとま

りもなかっただろう。

シズ それじゃあ、こいつら。

十郎 一難去ってまた一難か。

五六郎 シズ、何があっても、取り乱すんじゃねえぞ。

シズ お前さん……

五六郎、村人たちの前に座り土下座をする。

五六郎 すまねえ。この通りだ。

村人、クワや鋤を五六郎に向けて振り上げる。皆泣いている。

十郎 おい！やめねえか。

五六郎、その気持ちを一身に受け止める。五六郎を囲んだ村人の勢
いをとめられない。そこに平汰が飛び込んで来て。

平汰 おまえら何やってんだ。

前に立ち、五六郎をかばう。動きがとまる村人たち。

平汰 おめえら、鋤の向いてる方向が違うだろう！

村人、少し躊躇して。

シズ そうだよ。この人はね。川下に土を流さないように、こんなでっかい舟を作ったんだよ。命がけであんたたちを守ろうとしたんだよ。ああ、それに、たった今だって、舟が川下に流されないように、体を張って繋ぎとめたんだ。

五六郎、ずっと頭を下げている。泣いているのか肩が震えている。

村人1 わかっているよ。わかっちゃいるんだが。

平汰 五六郎。安心しろ。川下の村は随分前から川の岸に土のうを何重にも積んで、大水に供えていたんだ。だから、村は何とか無事だ。誰も水に流されちゃいねえ。

五六郎 ……本当か！

平汰 ああ。

シズ ……よかった。

十郎 ……よかった。

平汰 この何年か村は不作つづきで食うモノもろくにねえ。若い娘を下諏訪宿へやって何とか食いつないでいるんだ。誰もおめえを憎んでいないんじゃないねえ。…ただ、怒りを持っていく場所がねえんだよ。

誰も何も言えない。村人たち、腰が砕けて座り込む。そこに為一とオセツやってくる。

為一 五六郎さん。

オセツ おい、いったい何があつたんだ？

五六郎、天を睨みつける。

五六郎 ……オレたちは、この諏訪で生まれ、諏訪湖の水で産湯につかり、この地で取れた食べ物を使い、ここまで生きてきた。そのオレたちに…諏訪神さんよ！漫然とあんたらの道楽につき合っているのかい。飢えて苦しみながら死んでいった仲間に、それが諏訪人の定めだとも言うてやれって言うのかい！

皆、五六郎を見る。

五六郎 ……まっぴらだな。諏訪神さんよ。龍神さんよ。オレたちが、いつもあんたらの言いなりになると思ったら大間違いだ。人はなあ。時にはあんたらが思いもよらねえことをやらかすこともあるんだよ。

五六郎、鋤を見る。

五六郎、鋤を見る。

五六郎、鋤を天につき出して。

生憎だけだよ。俺たちには、まだこれがある。

五六郎、鋤を天につき出して。

五六郎 人はなあ、だだっ広い荒地を耕すために、たった一本の鋤を突き刺すことから始めるんだ。だから…。

五六郎、地面に鋤を突き刺す。

五六郎 この一振りがある限り…俺たちを止めることあてきねえ。

鋤をまた振り上げる。その時、あの弁天が光り出す。

五六郎 鋤を立てた分だけ、明日が見えてくらあ。(鋤を突き刺す)今の俺

には、希望しか見えねえや。ありがてえこった。なあ、ありがてえこったぜ！

五六郎の一振り。それは、諏訪の明日を見据える大きな一振りだった。

シズ
お前さん！

お美緒

お悠
うん。

為一
オセツ、俺たちもやろう。

オセツ

ああ。

ガツンと鋤やクワが地面に突き刺さる。村人が一人、また一人作業に参加する。黙々と作業が続く。滴る汗、泣いている者もいる。大きな石を持つ者もいる。大きなエネルギー。もう誰も彼らをとめることはできない。

その時、太鼓の音が遠くから聞えて来る。まもなく、辺りが、ザワザワゴウゴウと地鳴りの音がする。

お美緒

お悠
あの音は何？

風？それとも地響き？

お美緒とお悠。小高い丘に登ると。

お美緒

お悠

お美緒

五六郎

シズ

五六郎

シズ

五六郎。見て、すごい人だからだよ。みんな集まってくれたんだ。すごい、すごい人だよ。人で地面が揺れているよ、五六郎！

シズ、見る。すげえ人だからだ。

ああ、見るよ。あんた、すごいね。

山下の連中も川下の連中も、ホラ見ろ！漁師連中まで……とうと

シズ

う立ち上がってくれたんだ。お前さん。

十郎

五六郎

十郎

シズ

五六郎

シズ

五六郎

平汰

五六郎

十郎

為一

オセツ

シズ

五六郎

十郎

為一

オセツ

シズ

五六郎

十郎

シズ

五六郎

十郎

シズ

五六郎

十郎

シズ

五六郎

はははは、とうとうお前の阿呆が伝染したな。

なんだよそりゃ？

人の思いは人を引き寄せ、その勢いは村を飲み込み、いつしか邦をも動かす。……とうとう諏訪が動いたんだ。

まるで、御柱を見ているようだね。

おお。

平汰、信じられないという表情で。

おい！立派や神戸の旗が見えるぞ。

八ヶ岳の方からも来てくれたのか。ありがてえ。

どのようにして東の連中を集めたのだ。

為一とオセツ、顔を見合わせて。

さあ、どうしてですかねえ。

ねえ。

興奮した五六郎、鋤を片手に振り上げて。

(シズに) こうしちやあいられねえ。おい、俺たちもいくぞ。

ああ。

よし、オレも行くぞ。

あんたはやめてくれ。あんたまで阿呆が伝染しちゃ、たまったもんじゃねえ。

はははは、わかったよ。

諏訪十郎左衛門。諏訪湖を見据えて。

忠誠

五六郎！ワシからも頼む、この諏訪を救ってみよ！

五六郎

そこなくっちゃ！

五六郎、集まった沢山の人々に呼びかけるように。

五六郎

よおし、おめえら！白いまんまを食わしてやるからな。おめえらみんな、腹いっぱい食わしてやるからな。

全員

おおおおおっ！

「よいさ」のかけ声と太鼓の音。人々のざわめきは地響きのように諏訪湖にこだました。

転換

二幕（エピソード） 小高い丘

諏訪湖を眺める老人の姿。老人は絵を描きあげた。それを満足げに旅支度を始める。

その姿をじっと見つめている十郎左衛門。

もう、お発ちですか？

あなた様でしたか。何だかずっと見られているような気がしていました。

とうとう、浜中島は諏訪湖の湖面から消えましたな。

それだけではない。新たに六町歩もの新田が生まれたんだ。大したものですね。

ああ、まったく大したものであった。

さて、私は江戸に帰ります。この春には出版しなくてはならない本がありましてな。

ほう、それはいったいどんな書物ですか。

いやいや、書物なんて立派な物ではありませんよ。漫画です。単なる道楽です。

ご謙遜を。で、その題名は？

はあ、お恥ずかしながら、「富嶽三十六景」と申しまして。もともと作品はもう完成しておりましたが、富士の裏側も加えてみたくなりましてな。それが、信州諏訪湖です。

信州諏訪湖。

失われた物の美しさでもいいかもしれませんよ。そこに諏訪人の生き様を感じました。

なるほど、それは楽しみだ。

それではお元気で。

また気が向いたらおいでください。

北斎
為一
北斎
ははは、何しろもう年ですからね。約束はできませんが。先生、お待たせいたしました。ああ。

北斎は為一とは歩きだした。そこにオセツ、旅支度で為一の元に向かう。その後を綺麗に着飾ったお梶ことお美緒が追いかける。その後にお悠。

お美緒
オセツ！

オセツ！

お美緒
元気でな。

お梶も・・・お美緒さまも元気で。

見つめ合つお美緒とオセツ。

お美緒
オセツ、忘れるな。・・・喜びを分かち合えば倍になる。分かち合える人がいればそれが幸せ・・・だな。

二人の脳裏にオサトの姿が浮かぶ。二人に託された別々の運命を背負つ。

お美緒
為一
（気丈に）為一さん。オセツをお願いします。はい。その言葉、キモに命じます。

オセツ、為一と共に歩きだす。

十郎左衛門と北斎。見はるかす諏訪湖の彼方を見つめて。

十郎
北斎
北斎先生。この諏訪はこれから、いかなる邦に変わらましようや。どんな苦難にも負けない強い邦になるでしょうな。何しろとんでもない「阿呆」がおりますからな。

十郎
北斎

阿呆ですか。
はい。

深々と頭をさげる北斎。景色が変わる。その後ろから、村人たちも見送っている。北斎、諏訪湖に目をやり。

songs

♪神の宿る いにしえの 命はぐくむ 水は
永遠にたたえ 紺碧の その神秘をしずめる
ここで生まれ ここに立ち その命かれるまで
諏訪の海よ きこしめせ 永遠につづく 願いを

砕ける土 明日へと この一振りが 希望
諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を
希望の舟 永遠の みのりを この里わに
諏訪の神よ 龍神よ 黄金色の稲穂を

遠くに富士山、その手前に湖に浮かぶ高島城。そして何より先に目に飛び込む島ひとつ。その頂上には二本松が立ち。その根元に弁才天のホコラ。その島が弁天島とわかる。そしてその島の左となりにあるハズの浜中島の姿はなく、そこには満面と諏訪湖の水が波打っていた。

(富嶽三十六景 信州諏訪湖)

— 完 —

2008.6.24 J4BOX Chifuyu Kobayashi